
無限問題

城宮 美玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限問題

【Nコード】

N6343X

【作者名】

城宮 美玲

【あらすじ】

あたしの好きな人は、双子だ。その片方をあたしは好き。そして親友もいる極々普通の高校生。のはずなんです、あたしの通っている学校。少し変わっているのです。

さまざまな事件・問題が起きながらも徐々に恋も進んで行く……
スローテンポな奇想天外ラブコメディ！。

第一話 あたしと親友と双子と

突然ですが、すばり！あたしの好きな人は、双子です。

だからって二人共好きな訳ではないですよ？って言うか 見た目は別として、性格が二人共違うのです。

まず双子・兄の季野きのしゅう 秋は、クールでいかにも出来る奴って感じですが若干ヘタレ気味 そして眼鏡を掛けています。でも短気で怒りっぽくて しかも淡々と怒るので迫力倍増です ううっ思い出しただけで 。そして、なんとなくですが秋は、あたしの親友が好きなのではないかと思えます よく見つめてるし 。なんだかんだで、あたしが好きなのは、この秋なんだけどね 。 。制服は、ネクタイもちゃんと締めてワイシャツの第一ボタンまで締めてブレザーの前も締めて 真面目な優等生。制服をちゃんと着るだけで優等生になれるなら、あたしも着るんだけどなー。

次は、双子・弟の季野きのしゅう 夏騎は、いつでも笑顔で誰にでも優しくマイペース！心が広いので怒る事は、あまりありません。仕草が紳士と言うか レディーファーストが分かっていると云うか 。でも時々悲しそうな顔をするのは何故だろう？そして秋とは逆に冷静なのですが 頭の方があまり良くないので 補習仲間でもあります。制服のネクタイは付けては、いるのですが緩めていてワイシャツの第一ボタンとブレザーの前も締めていないのです。親しみやすいから良いとあたしは、思う。

そしてあたし、節中せつなか 春香はるかは、明るく活発！勉強は苦手だけど運動・スポーツなら負け知らずで補習の先生にはお世話になってます。そして秋が好き！もう四六時中見ていたいくらいLOVE、これには

親友も呆れる程。制服のリボンは付けてワイシャツの第一ボタンは外し、セーターを冬には着ます！スカートは、もちろんミニですよ。フフフ。よく変わっていると言われるあたしですが、このあたし達が通っている学校自体が少し変わってます。

おっと！忘れる所だった。あたしの親友を紹介しないと！

あたしの親友、松永冬音まつながふゆねは、常に冷静沈着でクールな毒舌。憧れる女子も少なくない。まさに異性より同性にモテるタイプ？そして他人の恋愛事情すしあひに頗る詳しい。なんでそんな事まで！？と言うような情報まで。一番敵に回してはいけない人だと感じている。男子より男前です。まあ、そんな冬音と何であたしみたいなのが仲いいのかって聞かれると、何でだろう？ってなるんだけどね。制服は、リボンじゃなくてネクタイでセーター（灰色）は、指先が少し出る位の大きさ。スカートは膝よりやや上？ミニまでは行かない感じですよ。

「あれ？どうしたの？」

噂をすればで、冬音が首を傾げながらあたしに向かって歩いて来る。あたしは、冬音に顔だけ向けた。

「別にどうもしないよ？」

「いや、周りがゴキ　で騒いでるのにあんただけ上の空だから」

「ゴキ　ごときで騒がないよ」

溜め息を吐いた後、冬音は呆れたように言った。

「聞いてなかったんだ。サイエンス部の部員が誤って近くにいたゴキに危険な実験前の薬品をかけちゃったんだよ」

「それでゴキ は？」

「かなりの大きさになって校内を駆け巡っております」

「それかなりの大事おおいだよ。冬音が冷静だからそうでもないと思ったら大事だよ」

そう言った直後に秋が急ぎ足であたし達の方へ駆けてきた。

「春香、無事か？」

「あっうん！」

「なんで春香だけなの？私も居るのに」

横から冬音がジロリと秋を睨んだ。秋は、眼鏡の縁を指で押す。

「いや、見た目無事だから」

「それ言ったら春香も無事でしょうが」

「春香は、か弱いんだ！松永と一緒にするな」

「お前は春香の保護者か」

腕を組んで冬音は、壁にもたれ掛かった。そして少し俯く。

「これからどうするんだろっ?」

「サイエンス部が元に戻す薬品を開発中らしい。出来るまで辛抱するしかないな」

今更ですが、こんな事件は日常茶飯事です。主にサイエンス部と何らかの事がキツカケで起こります。

「そう言えば、季野君は?」

「夏騎の事か?それなら、さっき購買にパンを買いに行ったぞ」

「どこまでもマイペースな」

冬音は、いつもの事なので諦めているのか溜め息を吐いただけで後は何も言わなかった。

本日二回目の噂をすれば、夏騎がパンを持ちながらこちらに歩いてきた。秋以外歩いて来るな　あたしの所に。

「三人、固まってどうかした?」

「騒ぎについて話してたんだ。ゴキ　が校内にいるって言うのによく食えるな?」

「腹が減ってはなんとやら　だからね」

そう言っつて夏騎は、パンを食べ始める。そして秋も夏騎からパンを受け取り食べる。ハア　　かっこいいなー。イケメンは、何をして

も絵になるよ。

「何、うっとり見てんの？」

あたしにしか聞こえない声で冬音が言う。慌ててあたしは顔を逸らした。

「み 見てないもん」

「秋を見てたでしょ」

なんで分かるんだろう 夏騎と秋は隣合わせだからどっちを見てるかなんて分からないはず…。

「まあ、どっち見てもいいけどね？私は」

そう言うってから冬音は、夏騎と秋に近づいて行った。あたしは、冬音の後ろから付いていく。

「二人だけずるいなーパン」

「ごめん、二つしか無くて」

夏騎は、申し訳なさそうに苦笑した。すると、横から秋が言った。

「それなら、少し分けてやるよ」

「上から目線ムカツクな！でも分けてほしい」

突っかかりつつも冬音は、パンがほしいらしい。そんな冬音に対し

て秋が溜め息を吐いた。

「誰が松永に分けると言った？これは、春香に分けるんだ」

「ええっ！あたし？」

「えこひいきだ！えこひいきー」

納得がいかないようで冬音が不機嫌になる。あたしは、冬音をなだめてから秋の差し出すパンを見た。思わず唾を飲む。

だってこれって……間接キスと言う奴ではないですか！

「顔が赤いけど大丈夫か？」

「だっ大丈夫！あたし…あんまりお腹空いてないから秋が食べて良いよ？」

今のあたしに間接キスは、無理でした……せつかくのチャンスを一……！と後で後悔する。

「春香がいらなら私が！」

「お前にやるパンはない……と言うか本当じゃない。俺が食べたからな」

「とことん嫌味だ……」

秋は勝ち誇った笑みでパンの入っていた袋を冬音に見せ付けた。さっきの今でもう食べたんだ……と言うか今の秋かつこ悪っ。

「季野くんは、くれるよね？」

冬音が半泣きだ…そんなに食べたかったんだ…パンを。ただのパンだよ？冬音って食べ物に関してだけは、変な執着を持ってるんだよね。

「可哀想だから全部あげるよ」

「わーい！フツ……双子なのにこんなに優しさに違いがあるなんてねー？」

パンを得たと同時に冬音の弱気は、なくなった。すごいなパンっ！

《……サイエンス部が元に戻る薬品を完成させ、出来事は解決しました。まだ小さくなったゴキ　がいるかもしれないので見つけた方は後を宜しくお願いします》

「解決したんだねー？」

「まだいるかもしれないんだって。春香、足元には気をつけなよ？」

「冬音、心配しなくて大丈夫だよ！あたしがそんなへま、する訳」

グシャ……

あたしの足元から嫌の音がした……。足を上げて見るのは……かなり怖い……。

「イヤーーーーー！」

「落ち着けっまず救急車をだな……」

「季野君が落ち着け……」

後日、上靴を買い換えたのは、言つまでもない事でしょう。

続くのでした。

第二話 勉強とパンと約束と…

「NOー!!」

頭を抱えてあたしは、叫んだ。耳を抑えて、顔をしかめながら冬音は、言った。

「いきなり何？」

「もうすぐテストだよね？」

「焦ってるんだ？勉強真面目にやってないから」

冬音は、余裕綽々であたしを哀れそうに見た。

「だってー」

あたしは、涙目になりつつある。

教室のドアを開けて、秋が近くに来た。

「松永、また春香を泣かせてるのか？」

「私がいつ春香を泣かせたって？春香を泣かせてるのはテストだよ！テ・ス・ト!!!」

今すぐにもバトルが勃発しそうな雰囲気。冬音と秋は、お互いを睨みつける。

そこへ、夏騎がまたパンを持ってやってきた。

「また喧嘩？」

「私、春香を泣かせてないよね！」

「え？どちらかと言えば泣かせているのは、勉強とテストじゃないかな」

「ほらー」

勝ち誇ったように笑いながら冬音は、腰に手を当てて胸を張った。

「無い胸、張って…」

呆れたように秋が言う。

これは、また喧嘩が始まりそう…。

「うっさいなー！胸だけが全てじゃない！」

「ない奴が言いそうなセリフだな」

ああっ！なんで二人共、喧嘩するのかな？秋を睨む冬音の肩を夏騎が叩く。

「パン、いる？」

「え……いいの？」

冬音が目を輝かせて夏騎を見た。冬音は、パン本当に好きだなー！

この雰囲気でパンは、どうかと思ったけど…夏騎ナイス！！

あたしは、夏騎に向かって親指を出した。夏騎は、それに気づいたようであたしに微笑んだ。

うわー顔同じだから思わずときめいちゃったよ……。眼鏡なかったら、どっちがどっちかあたし分からないかも。

「話は、戻るけど本当にテスト大変だと思っただよね。今の春香では」

「俺も今の夏騎ではテストが大変だと思う」

「珍しく意見が合った……。じゃあ今日、早速勉強会しない？」

やっぱりこの展開か……。薄々こうなるんじゃないかって思ってたけど……。

あたしは、夏騎を見た。夏騎もこうなると思っていたのか特に驚いていなかった。それともポーカーフェイスなだけ？

「でも誰の家でやるんだ？勉強会」

あたし達の意見まだ言っていないのに話が進んでいる……。まあ、嫌だって言うに決まってるというか嫌って言うから当然と言えば当然なんだけどね……。

「私の家は、事情があってダメなんだよね。春香の家は私が許可し

ない！男を春香の部屋に入れるなんてとんでもない事だよ」

「松永は春香の父親か……って事は消去方で俺達の家になるな」

「秋たちの家かー！見てみたいかも……楽しみだなー」

「それ位勉強も楽しめたらね……」

溜め息を吐いて冬音が呟いた。そしてその隣で秋も溜め息を吐いて言った。

「夏騎も楽しんでくれればいいんだけどな……」

なんか後半、冬音と秋の意見が一致している……仲いい事は、いいんだけど……。

ちよつとヤキモチを焼いてしまう。試しにあたしは、聞いてみた。

「じゃあ二人は、勉強楽しい？」

「俺は楽しい。色々知る事が出来るからな」

「え？私は、全然楽しくないけど」

冬音から意外な言葉が出た。秋は、目を見開いている。

「じゃあなんで成績上位なんだよ」

「知らないよ……でも楽しめば上がるんじゃない？」

「じゃあ春香が楽しんで勉強やったとして、学力が上がるか？」

三人は、あたしに注目した。

「……………上がるよ？」

「間！その間が一番傷つく！そして何故、疑問系！」

「だってハツキリ言って春香の学力が上がるなんて皆無だから」

「随分ハツキリと……………」

とにかく、あたしは勉強会に行かないといけないようです。多分どんなに嫌がっても強制的に連れて行かれる。

でも秋と夏騎の家に行けるんだー！でも勉強会とはいえ……………いきなり家は、ハードではないでしょうか？

第三話 虫と騒ぎと餡蜜と…

昼休みのチャイムが鳴り、あたしは冬音の席へと歩いて行った。

「食堂行こう！」

「えー…餡蜜付ける？」

「付ける」

「じゃあ行く」

そう言つて冬音は、すぐに立ち上がった。即答ですか…ちゃっかりしてるなー。

食べ物に釣られるんだよね…知らない人でも食べ物もらつたらついで行っちゃいそう…。

「食べ物もらつても知らない人について行ったらダメだよ！」

「何を突然…私は小学生か…」

「そつだ！秋達も誘わない？あつても今日、お弁当かな？」

あたしは、秋達の居る教室を覗いてみた。

「居る？」

隣から冬音も教室を覗く。

「居ないみたいだね」

「どこに行っただらろう？」

「さあ？居ないんじゃない…」

冬音は、セーターのポケットに手を入れて廊下を歩いて行く。

「ちょっと冷たいんじゃないの？」

「餡蜜が先」

冬音に続いてあたしも、ついて歩く。

「双子か餡蜜だったらあたしは、双子を取る！」

「そんな自信たっぷりと言われても…」と言っか春香の場合…」

「双子じゃなくて秋を取る！」

「だと思った…」

食堂に着き、食事を終えて冬音が餡蜜を食べようとした瞬間、校内放送が聞こえてきた。

《只今、学校内の昆虫観察で使う予定だった昆虫が入っているケージをサイエンス部の部員が誤って壊してしまい、校内に昆虫が逃げ出しました。甘い物をお持ちの生徒は、ご注意ください》

「またサイエンス部だって…」

「サイエンス部以外が問題を起こした事なんてあった？」

「ないね…」

逃げ出した昆虫、どうするんだろう？もちろん捕まえて戻すんだろうけど…。

でも、どうやって捕まえるんだか…。

「あ…季野くん達だ」

「え？」

食堂の出入り口の方で、秋達が何かしていた。

近づいて声をかけてみる。

「何してるの？」

「さっき昆虫が逃げ出したさ？だから罠を設置してるんだ」

「偶然近くにいたのが僕らだったから手伝わされて…」

「お前は、すぐにサボってたがな…」

秋達の仕掛けた罠に、少し経ってから昆虫達が集まって来た。

「あれ？」

昆虫の数を数えながら、秋が首を傾げる。あたしは、畏に引つかかっている昆虫達を見た。

「どつしたの？」

「三匹足りない……」

「どこ行っただらう？」

そう言ってから、あたしは周りを見回した。周りにいるとは決まっていなくても、なんとなく見回してしまう。

「三匹くらい、その内出てくるでしょ？踏んでなかったら」

「確かにその通りだけど、なんて事言うの……」

「私は、餡蜜食べてくる」

冬音の言葉を聞いて、秋が顔を上げた。

「餡蜜？……止めておいた方がいいんじゃないか？」

秋は、目を逸らして眼鏡の縁を指で押しながら、そう言った。冬音は、不満そうに顔をしかめる。

「嫌、私は食べるよ」

そう言って冬音は、食堂に入っていく……少ししてすぐに戻って来

た。

「どうしたの？餡蜜は？」

冬音は、力なく首を横に振った。

「食べられない……」

「どうし……！？」

あたしの前に冬音が差し出した餡蜜を見て、どうしてなのかすぐに分かった。

餡蜜に三匹の昆虫が……。

「もしかして、残りの……？」

「ああ、餡蜜と聞いてなんとなく予感は、していたが……」

そう言って秋は餡蜜に付いている昆虫三匹を取り、ケージに入れた。そして餡蜜は、もちろん食べられないので……。

「私は一体今日のデザート、何を食べればいいのか？」

「今日くらい、我慢しろよ……」

呆れながら秋が言った。フラフラと冬音があたしの所に歩いてきて両肩を掴んできた。

「うっー、春香ー」

涙目だし、もう冬音半泣き状態……。あたしが困っていると、夏騎が冬音の肩を叩いた。

冬音は、振り返る。

「実は、チヨコが余ってるんだけどいる？」

「是非ください！」

両手を出して冬音は、夏騎に言った。夏騎は何処からかチヨコを出して冬音に渡した。

「デザート之恩人！今度何かお礼します」

「楽しみにしてるよ」

「大袈裟な……」

あたしと秋は、冬音のデザートに対しての執着に呆れて思わず溜め息を吐いてしまうのだった。

後日、授業のその昆虫を観察する事になり……。

「あたし達のクラスで使う昆虫だったんだ……驚いたね？冬音……？」

「先生ー松永さんが倒れましたー」

餡蜜台無しにされちゃったんだっけ……。あたしは、また溜め息を吐いた。

続く……？

第四話 勉強会と部屋と教科書と…（前編）

只今、放課後。冬音は、体力切れで机に伏せている。

え？勉強会は、第二話の日にやったんじゃないかって？

あの日は、冬音の都合が悪くて無しになったのです。

まあ、第二話とか言ってる時点で、あたしは変なんだと思っけどさ？

「行くんだったけ？今日、季野君達の家」

「うん…だってもうすぐテスト近いし…」

「この世からテストなんて無くなればいいのに…」

冬音は、なんだかアンニュイみたいです。そんな冬音を私は、なだ宥める。

「まあまあ…。秋達、まだ教室にいるかな？」

「見て来れば？私は、もう動きたくない…」

「じゃあ見てくる。ちゃんと動けるように休んでてね？」

「はいはい」

顔を伏せて、冬音は手だけをあたしに振った。あれ？この場合、冬音の様になるのは、あたしなのでは…？

そんな事を考えながらあたしは、教室を出て秋達の教室を見る。

「えーと…あつ秋！」

「ん？春香か、どうした？」

「今日、勉強会なんでしょ？まさか忘れてたんじゃ…」

「忘れてたらこんな事しない」

そう言って手錠を付けられた夏騎を前に出した。

「ぱつと見たら、なんか問題起こした人だよ！可哀想だから止めてあげて！」

「…春香が言うなら…」

秋は、渋々承知してくれた。

解放されて夏騎は、一息ついている。

「ありがとう」

と言って夏騎は、あたしの手を握った。

「あついえ…」

つて…あたしは、なんでこれだけで赤くなってるんだ！純情な乙女か！いや、そうだけど…。

でも、秋以外にこうなるのは…。

そんな事を考えている間も夏騎は、ずっと手を握っている。

「季野くん…」

フラフラと覚束ない足取りで、冬音がやって来る。

「どうしたんだ？いつもの覇気がないな」

「うっせーよ、お前に用はない」

「不機嫌なので少しの口の悪さは、許してあげて……」

今にも喧嘩が始まりそうなので、そうなる前にあたしは秋に言った。

「秋じゃなくて夏騎に何か用なの？」

「お菓子を恵んでください」

「今日は持って来なかったの？」

冬音は、あたしを見て溜め息を吐いた。

「持ってきていたら頼まないでしょ？」

「そりゃそつだ」

あたしが頷くと、隣で秋がズボンのポケットを探っていた。

そしてポケットから飴を取り出すと、冬音の前に出す。

「夏騎は今日、何も持ってないんだ」

「チツ」

冬音は、あからさまな舌打ちをすると秋から飴を奪い取った。

本当に秋の事、嫌いなんだな…。でもちゃんと飴は、食べるんだよね…。

「ところで…そろそろ学校出ないと勉強会の時間なくなるんじゃないのか？」

「それはそれで良い！」

「お前だけやれや」

「じゃあ僕逃げるから」

「おいつ真ん中の奴！」

あたし達は、秋によって強制連行されました。冬音に至っては、飴を没収されて尚更不機嫌。

季野家の家は、一言で言うと…とにかくデカイ。広い庭まであり、執事にメイドまで…。

「お金持ち…？」

「部屋どい？」

冬音は、家そのものより二人の部屋が気になるらしい。あたしもどつちかって言うと部屋の方が気になる。

「俺と夏騎の部屋、二つあるんだがどっちにする？」

「お前の部屋、本とか参考書がごっそり置いてありそうだな…。正直言つてやる気が失せる」

「松永は、いつもやる気がないだろ…」

「じゃあ消去法で夏騎の部屋？」

そう言つてあたしは、夏騎を見た。続いて秋と冬音も夏騎を見る。

「別にいいよ」

夏騎は、部屋まであたし達を連れて行くとドアを開けた。大きな窓とベッドと机にテーブルと本棚と言うシンプルな物しか置いてない部屋だった。

「意外ー！もっとゴチャゴチャしてると思ってたのに…」

「春香に僕は、どう見えてるんだろうね？」

部屋を眺めていると、なんだかよく分からない箱が置いてあった。

「この箱は？」

「ああ、それは……」

夏騎が答える前に冬音が勢い良く箱の元へと走り、開けた。

「たっ宝箱……」

「宝箱!?!」

何か如何わしい物でも入っていたり……? そんな期待と不安を抱きながらあたしも箱を覗いて見た。

しかし想像していた物と全く違う物がその箱には入っていた。

「大量の………雨? あっ間違えた。大量の飴?」

「これは?」

冬音とあたしは、夏騎に視線を移す。まさか夏騎って甘党なの?

「松永さんが飴をよく食べてるから予備にいつも僕が持ってるんだよ。今日は忘れてしまったけど」

「神様」

「冬音は、飴持ってれば誰でも天使か神様だよな?」

秋は、椅子に座り教科書とノートを開き始めた。

「そろそろ勉強会を始めないか?」

「そっだね！冬音、教科書とノートは？」

あたし達、三人も椅子に座り教科書とノートを開く。

あたし 秋

テーブル

夏騎 冬音

と言う感じで座っているの、あたしはドキドキしっぱなしだし秋と冬音は睨みあってるし、夏騎は一人で問題解き始めちゃうしで散々なのです。

「ここどうやって解くの？」

秋は、冬音を睨むのを一旦中止してあたしの教科書を覗き込む。あまりの至近距離に自分の心臓の音が聞こえてしまうのではと心配した。

それにしてもまつげ長い…サラサラの黒髪にキリっとした目元…。思わず眺めてしまう。

「ここはだな…ん？俺の顔に何かついてるか？」

「うっん！続けて？」

「…ああ…」

教科書に視線を戻して、また秋は話し始めた。あんまり見過ぎると不自然だよね…。

あたしは視線をなんとなく夏騎に移した。夏騎と目が合い、あたしは何故か顔を逸らした。

なんで顔を逸らすの？あたしは秋が好き……でも夏騎にドキドキしてる……。秋が好きだから顔の同じ夏騎にドキドキしてるの？それとも、夏騎が好きでドキドキして、顔の同じ秋にドキドキしてるの？

あたしが好きなのは……どっち？

！

後編へ続く

第四話 勉強会と部屋と教科書と…（後編）

勉強会をしている間中あたしはずっと、どっちが好きなのか考えていた。

秋と夏騎には気づかれなかったけど冬音にバレて帰り道の公園で話をする事になった。

その公園が物凄く子供多いっ！さっさと帰らないと怒られるぞ。と思っていた矢先に親が向かえに来て子供が帰り、寒々とした雰囲気になった。

今の言葉撤回するから戻ってきてー！と思っても戻って来るはずがなく、ついに冬音が口を開いた。

「秋と夏騎君のどっちが好きなのか悩んでいるのか…」

早々に核心に触れてきた。凶星だった為、あたしは一瞬言葉を失った。

あたしが答える前に冬音が話を続ける。

「確かに外見同じだしね…双子だから当たり前なんだけど」

苦笑しながら冬音は言う。あたしは黙ってその話に耳を傾けていた。

冬音の言葉は、まさにその通りであたしは、まだ言葉が見つからない。

「外見は、同じだけど二人共違うでしょ。秋は嫌味で夏騎は神様で……」

「それは冬音だけの印象でしょう!」

「やっと喋った」

そう言っつて冬音は、笑った。冬音の正直な事だったのかもしれない……あたしに喋らせようと言った事なのかもしれない……それでも……。

それでも……冬音の言葉で少なからず救われた。

「本当だ」

あたしは、そう言っつて笑った。

「それで内面的にどっちが好きなの?」

「え?うーん……秋かな……」

「……この辺に中位の石があるよね?それに……今から行けば時間は大丈夫」

冬音は、言っつて石を探し始める。それをあたしが防ぐ。

「まさか投げるの!？」

「なんで嫌味眼鏡な訳？」

おおっ嫌味から嫌味眼鏡にグレードアップした…じゃなくて!

「あたしが夏騎って言えばそんな事しようとしなの?」

「私は……私は、冬音を大切にしない人なら誰も嫌だ」

「じゃあ…あたしを泣かせるような事があつたらどうするの?」

冬音は、目を逸らしてから背を向けて振り返らずあたしに言った。

「早く帰らないと怒られるよ?」

「うん……」

あたしは、頷いて冬音の後ろを歩いた。

冬音は、最後まであたしの問いに答えなかった。

次の日の朝、あたしはずーっと冬音を見つめていた。その事に気づいて冬音があたしの方を向く。

「何?どうかした?」

「うっん、なんでもない」

「昨日の事だけどさ…？私は、その時にならないと分からない。だからその時が来ないよう祈るよ」

「ありがとう」

そんな話をしているうちにちょうど先生が来て、あたし達は、それぞれの席に戻っていった。

続く！

第四・五話 私と双子と親友と… side冬音

親友の春香は、普通より少しだけ可愛い。けれど本人に自覚は無く、周りの男子のアプローチにさえ気づかない鈍感だ。

そんな春香にも好きな人がいる。双子の秋と夏騎君だ。昨日の勉強会で分かった事だけど、春香は秋と夏騎君のどっちが好きなのか分からないで困惑している様子だった。

本人は、秋って悩んだ末に言ったけれど、また悩んだりするのだろう…春香の事だから。

多分、夏騎君が眼鏡を掛けて秋が眼鏡を外してただ隣に立っているだけでいたら、春香にはどっちがどっちだか分からないだろう。

けれど私は分かる。好きだからとかじゃなくて秋が嫌いすぎて眼鏡無しでもなんとなくあの嫌味オーラを感じるのだ。

私は、実を言うと恋をした事がなくて……。今そんな暴露した所で何の意味もないんだけど。

それとこれも意味のない暴露なのかもしれないが…。

私は、意図的に秋と夏騎君を季野くん（君）と呼んでいる。

まあ、秋は呼び捨てにして何の抵抗もないのだけれど…。

「松永さん、春香見なかった？」

「季野くん？春香なら季野君……秋と図書室だよ」

「また先を越されたか…ありがとう」

お礼を言っつて季野くんは、行こうとして足を止めた。そして振り返る。

「どうして松永さんは、僕と秋を苗字で？」

「別に理由はないけど？」

「訂正、どうして僕の事を苗字で？秋は秋なのに」

「特に理由なんてない」

「そっ…」

季野くんは、図書室の方へと歩いて行った。理由なんてない…訳ない…。

納得しやがって…と心の中で言っつてもどうにもならない。

確かに秋は秋だ。本人の前で呼び捨ては、ムカツクからしいけどさ？だから向こうも私の事を苗字で呼んでる訳だし。

でも夏騎君の場合は、秋と理由が違う…嫌味な訳でもムカツク訳でもない。

そう言えば夏騎君、秋と春香が図書館って言っつたら…また先を越されたか…と言っつていた。

そうか…夏騎君は、言葉にも態度にも表さず、ましてや声にも出していないが…春香に惹かれているのか…。

双子が揃って春香に惹かれるか…さすが双子？

秋は、態度に出していて夏騎君は、態度に出さないという違いがあるにしろ…根本的な事は変わらない…

春香に気があると言う事は…。

「松永、春香見なかったか？」

「お前と一緒にじゃなかったの？」

「そのお前って言うの止めるよ。さっきまで一緒に用事を別れた後に思い出して…」

「だから探してるのか…」

夏騎君が聞きに来たと思ったたら次は秋か…。今日の双子は、どこまでも似ている…。

「季野くんと一緒なんじゃないの？さっき探してたし…」

「俺も季野なんだが…。それにしても夏騎も探してたんだな」

「え…？ああ…」

なんで分かったんだろう…？苗字しか言っていないのに…。

「悪かったな。じゃあまた探しに行くとするか…」

そう言っただけは、春香を探しに行った。今日の春香は、よく探されるな…。

「あのー…秋君って好きな人いたりするんですか？」

「え？うん、いると思うよ」

「そうですか…」

頭を下げて、違うクラスの女子が俯きながら行ってしまった。

双子は、結構イケメンでモテる。少し前だと古いが下駄箱にラブレットが入っていたりとか…。

あまりにも肉食系な女子だと、私が対処して…その結果被害が私に及ぶ。つまり逆に対処した私が好かれてしまう。

だから私を好きだと言う女子が増える…それだけ双子がモテると言う事になる。

だから私としては迷惑な話だ。対処しないと秋が困る…それは良いのだけれど夏騎君が困るようになったら、また別だ。

薄々勘付いていたけれど……そうか……私は……

夏騎君が好きなのか……。

「冬音っ！ずっと探してたんだよ？」

そう言っつて春香は、私の手をとった。私は、苦笑しながら春香に言う。

「私、ずっとここにいたよ？」

「えっ嘘！」

「春香、ずっと探してたんだぞ」

「僕も」

春香がいる所に双子が集まる。私は、春香を見つめている夏騎君をチラッと見た。

ねえ、夏騎君……私はずっと……ここにいますよ？

続く

第五話 気づきとダイエットとヤキモチと…

テストが終わり、とりあえず一安心です。そんな訳で勉強会の時と同じポジションで食堂の席に座り、昼ご飯を食べているのですが…。

「もうちょっと量を減らしたらどうだ？太るぞ」

「太らない体質なんです！。それよりお前こそサンドイッチ三・四個って…」

「お前って言うの止める」

「じゃあ、もやしっ子」

秋と冬音の二人は、睨み合いながら口論をしている。昼ご飯をちゃんと食べながら…。

前は、秋が冬音を好きなんじゃないかと思ったけど…なんかこの雰囲気だと有り得ない…今更だけど。

「ほら、春香を見る！量が少なめだからこんなに細い！」

「春香が細いって…まるで私が太いみたいじゃない！」

「…フツ…太いだろ？」

「鼻で笑ったー！こいつ、鼻で笑ったよ！春香」

どうしよう…話題があたしにまで及んでいる…。とりあえず、何か

言おう！言ってから考えよう！

「ふ…冬音は、痩せてる方だよ」

「春香は、余裕だからそんな事言えるんですよ…八八八」

あれー？なんかネガティブな方向へ？もしや、さっきのは黙っているが正解だったのか！でも言わなかったら言わなかったで何か言われそう…。

「こうなったら私は、これから断食する！」

「それ、絶対死んじゃうよ！止めなよ！」

「止めるな！私の心が揺らいでしまう…」

「揺らせる為に言ってるんだよ。止めてよ」

案の定、冬音は、次の日の朝にフラフラになりながら学校へと来た。

「大丈夫？」

夏騎が冬音の傍に行き、そう声を掛けているのが聞こえた。あたし達と別のクラスなのに夏騎は、わざわざ冬音を心配して来てくれたらしい。

「大丈夫…心配してくれてありがとう…」

「そっか…じゃあまた後で見に来るから」

冬音に微笑みかけてから夏騎は、自分のクラスへと戻って行った。冬音は、ずっと夏騎の後姿を廊下に出てまで眺めていた。

これは、最近気づいた事だけれど、冬音は夏騎が好きなんじゃないかと思う。いや、絶対にそう！女の勘って奴かな？

《サイエンス部が幻覚水を発明しました。サイエンス部が幻覚水を持ってるので廊下を歩く方は、ご注意ください》

そんな校内放送が流れた後にあたしは、冬音が居ない事に気づいた。どこに行っただろう？そう思っていると廊下で誰かがぶつかる音と何かが割れる音が聞こえた。

嫌な予感がしながら、あたしは廊下に出て見て見る。

すると、そこには綺麗な桃色をした水………を被っている冬音がいた。そして冬音と反対の方向にサイエンス部員がいた。

もしかして、さっきの放送で言ってた幻覚水を持ったサイエンス部と冬音がぶつかって、幻覚水を冬音が被ってしまっただけの状態にいたのでは？

なんかそれっぽい！あたし探偵の才能あるかも！

「一体どうしたんだ？」

「春香、大丈夫？」

秋と夏騎も騒ぎに気づいて廊下へ出てきた。今頃ですが、この学校

の廊下は広いです。大きな窓も廊下の端に付いています。高所恐怖症の人には、辛い位置にある窓です。

「あたしは、大丈夫だけど冬音がさっきの放送の水を……」

「飲んだのか？まさかそこまでバカだとは……」

「違うよ。さすがに冬音は、そこまでバカではないよ」

あたしは、とりあえず冬音を抱き起こした。そして呆然と座っている部員を見た。

「幻覚水って被ると、どうなるの？」

「さあ？香水を付ける位の量しか想定してなかったの」

「能無しが…冬音がこんな状態なのに！」

「春香、落ち着いて」

そう夏騎に言われて、あたしはもう一度聞き直した。

「その香水付ける位の量だと、どうなの？」

「自分の今、望んでいるものが見えます。この人が被った量だと…
小一時間もすれば戻りますよ？」

冬音が今、望んでいるのは食べ物…かな。それが夏騎か…。あたしも少し欲しい…。

「それにしても綺麗な桃色だね？」

「男性でも使いやすいようにと思って……」

「逆に使いにくいと思うよ……桃色だよ？ピンクだよ？」

冬音は、保健室に寝かせて置き、放課後になってから様子を見に行く事になった。

「あれ？松永さんは？いつも帰り一緒だよね？」

他のクラスの女子が教室を見回しながらあたしに言ってきた。

「えっ？うん、そうだけど貴方は？」

「ああ、私の名前は本井桜ほんいさくら！季野君達と同じクラスだよ。よろしく」

「よろしく。あたし、これから保健室に行くの」

あたしがそう言つと本井さんは、驚いた顔をして聞いてきた。

「具合悪いの？」

「そうじゃなくて……ほら校内放送で言つた水が冬音にかかつちゃつて……だからこれから様子を見に行く所なの」

「そうなんだ……私も様子見に行つていい？松永さんとは前から話してみたかったの」

「いいよ」

あたしと本井さんは、話をしながら保健室へと向かった。でも、これから本井さんの意外な関係を知る事になるなんて思いもしなかった…。

保健室のドアをノックしてから開けると先生は、何かの用事でいらいらしかった。

代わりに秋と夏騎がいた。冬音は……布団に包まっている。

「遅かったな」

「うん。そうだ！あたしの他にさっき知り合った子が来てて…」

本井さんの姿を見た途端、秋の表情が強張った。あたしが首を傾げている間に本井さんが話し始める。

「こうしてちゃんと話すのなんて…久しぶりだね？」

「…そうだな」

「あの…えっと…知り合い？」

「私と秋は、前に付き合ってたの」

この言葉を聞いた瞬間、あたしの頭の中でこの言葉が繰り返された。

「付き合ってたって…？」

「その言葉通りの事。もう別れたけど、私はまだ未練がある」

本井さんは、そう言って秋の腕に自分の腕を絡ませた。

「離し…「離しなよ」

さっきまで布団に包まっていた冬音が立って本井さんの腕を掴んだ。

「なんで？」

「人の恋心分かっててそう言う事するのは…私は好きじゃない。からかいたい気持ちは分かるけど」

「…っ！そうだね…」

なんか冬音、かっこいいけど…あたしをからかいたい気持ち分かってちゃうんだ…。それさえなければ良い感じなんだけど…。

「ねえ？夏騎君…私と付き合わない？」

それを聞いて、さっきまで余裕だった冬音が慌て始める。あたしは、冬音の代わりに本井さんに聞いてみた。

「どうして夏騎なの？」

「だって秋は、ダメでも夏騎君なら良いんじゃない？ね？」

「季野くんにするならこいつをあげるよ」

冬音が秋を本井さんの前に出す。

「ダメ。友人とどっちが大事？」だいじ

「……………チツ」

「松永…お前恐ろしい奴だな」

冬音に解放された秋は、冬音と間合いを取っている。

「どっ？夏騎くん」

「じゃあ…いいよ」

そう夏騎が答えた後、二人は保健室を出て行った。

「……………冬音、大丈夫……………冬音？」

今の返事のショックで冬音が倒れたと思い、近づいてみると…ただ眠ってしまっただけだった。

「良いタイミングで眠ったね…」

あたしは、眠っている冬音にそう言ってから溜息を吐いた。

続く…！

第六話 恋と本屋と帰宅と…

夏騎が本井さんと付き合おうと言った翌日の昼休み、あたし達の教室に来て夏騎が言った一言があたしと冬音と秋を唾然とさせた。

「今…なんて？」

「だから、本井さんと付き合っのを止めた」

「なんで急に？だって昨日は…」

「見破られちゃったからね」

夏騎のその言葉にあたしは、首を傾げた。秋は、何も言わずに夏騎を見つめているだけだった。

今日は、とても不自然で…夏騎の「付き合っのを止めた」発言に質問をしているのは、あたしだけだった。冬音と秋もいるのだけれど、一言も話さない。

「季野くん…ちょっといい？」

一言も話さなかった冬音が夏騎にそう言った。夏騎は、頷いて冬音について行き、教室を出た。

あたしと秋は、暫く二人の出で行った方を見ていた。

「じゃあ俺は、教室に戻る。夏騎も、どうせ話が済めば来るだろ」

「うん、それじゃあまた放課後にね」

「ああ」

秋は、あたしに向かって小さく手を振ってから教室を出て行った。昼休みが終わるまで、まだ少し時間があるので寝ようと机にうつ伏せようとしたり、教室のドアの近くで白衣を着た女子生徒が教室を見回していた。

あたしは、立ち上がって女子生徒の近くに行く。白衣って事は、サイエンス部かな？サイエンス部しかないよね…。

「どうしたの？誰かに用事？」

「あっ！覚えてませんか？昨日、廊下で…」

彼女に言われて、あたしは、昨日の事を思い出した。そして冬音とぶつかったのがこの子だ。

「そつだ！冬音にぶつかったサイエンス部の…。あたしに用事なの？」

「はい、この間ぶつかった方にお詫びをしたかったので」

「そうなの？でも生憎冬音は、どこかに行っちゃってるの」

「そつだったんですか…それでは、また後で来て見ます」

彼女が立ち去ろうとしたのをあたしは、引き止めた。

「ちょっと待って！名前は？」

「冠かん風なぎ紅葉もみじです」

冠風さんは、頭を下げると足早に自分の教室へと入って行った。今更だけど、あたしのクラスは一組で秋達のクラスが三組。そして冠風さんのクラスが四組らしい。

同い年なのに何故敬語？

あたしが席に戻ったのと同時に冬音が戻って来た。

「話、終わったの？」

「うん、春香ってさ…幸せ者だよね？」

「え？」

「あつ！チャイム鳴る時間まで、まだ余裕ある」

しっかりと聞き取れた…あたしって幸せ者なの？そう聞こうとして、冬音に話を逸らされる。

もう聞こえちゃってるけど冬音は、何故？とあたしに言わせてくれない。

「そついえば四組の冠風さんがお詫びしたいとかで教室に来てたよ？本当についさっきの事なんだけど…」

「え？そうなんだ…時間あるし、ちょっと行ってくるね？」

「うん」

戻って来たばかりなのに冬音は、また教室を出て行ってしまった。
今日の冬音は、大変だなー。

そっだ…夏騎と何話してたか聞きそびれた…。

そんなこんなで冬音が話を終えて戻って来たのは、チャイムの鳴る
ギリギリの時間だった。

放課後になり、あたしは早速冬音に聞く事にした。

「夏騎と何を話してたの？」

「話と言つか…何と言つか…」

あたしの問いに冬音は、言葉を濁すだけだったけれど、このままで
はダメだと思ったのか濁すのを止めた。

「……何を話したかは、季野さんに口止めされてて言えないから無
理」

「口止め料として飴玉もらってるんだね？」

「私が喋らないとすればそれしかないでしょ」

ポケットから飴玉の入った袋をあたしに見せて冬音は、そう言った。

「でもそこまでして他の人に知られたくない話をしてたんだね？」

「知られたくないと言うか…言ったら春香が混乱する事になるから」

「あたしが混乱する？」

また、聞こうとした所で邪魔が入ってしまった。秋と夏騎が教室に鞆を持ってやって来たからだ。

「何か話してみたいんだけど、もういいの？」

「うん、大丈夫」

さすがに本人の前で聞けないのであたしは、ついそう言ってしまった。これで今日は夏騎と何を話してたか聞けないよ…。

「じゃあ帰るか」

秋がそう言った後に冬音が手を挙げた。

「ちょっと私、用事があるんだけど」

「何か買うのか？」

「本、今日が発売日だから」

「奇遇だな、俺も本屋に用事がある」

「季野君と同じなんて嫌な奇遇だな」

あからさまに嫌な顔をしながら冬音が言った。今にも喧嘩が起ころともおかしくない雰囲気。

冬音達の言っている本屋は、学校を出て左に三分あるいた所（かなり近い場所）にある。しかし、そうなるとう一つ問題が残る。

「冬音は、ともかくあたし達の家は、学校を出て右だよな？」

「俺達は、本屋に寄ってから帰るけど、春香達は、どうするんだ？」

「俺達って…一緒にしないでよ！」

「いや、一緒だろ」

口論している二人に対して、あたしは出来るだけ声を大きくした。

「えーと、あたしは真っ直ぐ帰るかな…あんまり遅いと親が心配するし」

「僕も春香と同じ」

「そうか」

一旦、口論を止めて秋が頷きながらそう言った。

本当は、秋ともう少し一緒に居たい…でもそう言ったら、あたしが秋を好きな事がバレてしまうかもしれない。間接的な告白っぽい言葉は、なるべく避けなければ…。

どうせ告白するなら「好き」って気づかれない内にハッキリ言いたい。そう思いながら、あたしは、鞆を持った。

学校を出て、あたし達は右に、秋達は左に曲がった。ふと、振り返ると冬音が手を大きく振っていた。

あたしは、少し恥ずかしくて冬音に小さく手を振った。

「それにしても…秋と冬音、喧嘩してないかな？」

「してると思うよ」

「ええっ！」

夏騎にそう言われて心配になったあたしは、つい後ろを振り返ってしまう。

「心配しなくても大丈夫だよ。あれは、照れ隠しだから」

「照れ隠し…？」

秋が一体、何に照れているのだろうか？あたしが聞く前に夏騎は、言った。

「秋、松永さんが気になってるみたいだから」

「え…？」

あたしは、一瞬フリーズした。その言葉が理解できなかった…違う…理解したくなかったんだ…。

「冬音に気があって…喧嘩になるような事をワザと？」

「まるで小学生みたいだろ？」

「うん」

それより…あたしが秋を好きで秋が冬音を好きで冬音が夏騎を好きで…。まさに三角関係じゃない！

あたしは、家に帰るまでずっとそんな事を考えていた。

続くよ！

第六・五話 本屋と帰宅と違和感と… side冬音

昼休みに突然「付き合っの止めた」と夏騎くんが言い出した。春香は、戸惑っているようで夏騎くんに質問をしている。季野君も冷静を装っているのだろうけど、内心戸惑いを隠しきれないだろう。

「季野くん…ちょっといい？」

私がそう言つと夏騎くんは、頷いて私の後に続いて教室を出た。ふと、後ろを振り返ると夏騎君が教室を出て自分の教室へと戻って行くところだった。

少し歩いて、あまり人の居ない所で立ち止まる。

「どうして昨日の今日で別れたの？理由は、見当が付くけど…」

「本井さんに好きな人がいるのがバレて…しかもそれが春香って事までバレたんだ…。恋に破れたらいつでも付き合ってあげるって最後に言われたけど」

「本井さんは、まだ諦めたつもりはないのか…」

とにかく、理由は分かった。好きな人がバレたので別れたって訳だ。それにしてもバレるの早いなっ！どれだけ態度に出してたんだ…。

それか女の勘って奴？私は、そんなの信じてないけど…当たっちゃってるからな！。

「じゃあ、恋を实らせないと！本井さんも遠回しに頑張れって言っ

てくれてるんだから！」

「そうだね、ありがとう」

夏騎君が教室に向かって歩き出した。私は、少しの間その場に立っている。

好きな人が…目の前で好きな人の話をする。自分で聞いておいてないんだけど…心が痛い。

私…お礼なんて言われる筋合いないんだよ…。多分、私はこれからも夏騎君の恋愛相談を受けるだろう…。私以外に他人の恋愛鋭い相談相手なんていないだろうし…そしてその度に夏騎君にお礼を言われるのだろう。

もし…夏騎君の恋じゃなくて春香の恋が実ったら、本井さんより先に私が慰めよう。そして…頑張って夏騎君を振り向かせよう…。

そんな事が出来ればだけど…。私が教室に戻ると春香が私に気づいて振り向く。

「話、終わったの？」

早々に春香がそう聞いて来る。話の内容知りたいんだろうな…。それにしても、春香って本井さんを無自覚だけど味方(?)につけて、夏騎君に好かれてて…。

「うん、春香ってさ…幸せ者だよな？」

「え？」

ついで口が滑ってしまった。春香が目を見開いて私を見ている。こつこついう仕草でさえも夏騎君には可愛く見えるのだろうか？愛しく…思うのだろうか？

「あつ！チャイム鳴る時間まで、まだ余裕ある」

春香が質問して来ると思い、とっさに私はそう言った。

「そういえば四組の冠凧さんがお詫びしたいとかで教室に来てたよ？本当についさっきの事なんだけど…」

「え？そうなんだ…時間あるし、ちょっと行ってくるね？」

「うん」

私は、春香に質問されても困るので戻って来たばかりだったけれど教室を出る事にした。夏騎君の好きな人は春香なんだよ？なんて…言ったらまずいよね…。

えーと…確か四組だったかな…。とりあえず四組の生徒に冠凧さんが居るか聞いてみた。

「紅葉、一組の松永冬音さんが呼んでるよ」

クラスメイトにそう呼ばれて来たのは、小柄で大人しい感じの可愛い女の子だった。私の周りって可愛い子ばかりだな…どうせならイケメンばかりがいい…。

「この間は、すみませんでした」

「いえ、私もそのお陰で保健室の先生にダイエットの事バレて…今は、たくさんご飯を食べてるよ」

「そうだったんですか！ダイエットなんかしなくても痩せているのに…」

「やっぱり？なのに季野君が…」季野君って季野秋…君の事ですか？

頬をほんのり赤く染めて冠風さんは、聞いて来た。私は、話を遮られて一瞬呆然としてしまった…。

「そうだけど…？」

「羨ましいです！松永さん、いつも季野君と一緒に…」

「そう？喧嘩ばかりしてるのにな？」

「傍に居られるだけで幸せじゃないですか？」

冠風さんは…秋が好きなのか…と言う事は、春香の恋敵ライバルになるって事？

前途多難だな…。夏騎君に好かれ秋の元カノと会い、次にこの子。

「もうすぐチャイム鳴りますよ！」

「え？本当だ！」

急いで教室に戻るとチャイムの鳴るギリギリの時間だった。

放課後になり、春香が私に聞きに来た。

「夏騎と何を話してたの？」

「話と云うか…何と云うか…」

春香の問いに言葉を濁し続けたけれど、さすがにこれだけではダメだ。一旦、言葉を濁すのを止める。

「……何を話したかは、季野さんに口止めされてて言えないから無理」

私は…何故かそんな嘘を吐いてしまった。夏騎君の事も考えればこの答え方が妥当だろう。運のいい事に春香は信じ込んでいる。

「口止め料として飴玉もらってるんだね？」

「私が喋らないとすればそれしかないでしょ」

ちよつとポケットに常備していた飴玉があつたのでそれを春香に見せる。

「でもそこまでして他の人に知られたくない話をしてたんだね？」

「知られたくないと云うか…言ったら春香が混乱する事になるから」

「あたしが混乱する？」

おっと失言……。聞かれそうなところで秋と夏騎君が来てくれたのでなんとかこの場は、切り抜けられそうだ。

「何か話してみたいけど、もういいの？」

「うん、大丈夫」

「じゃあ帰るか」

そう秋が言った後に私は、手を挙げた。春香達が私を見る。

「ちょっと私、用事があるんだけど」

「何か買うのか？」

秋：なんで私が何か買うって分かったんだ……。

「本、今日が発売日だから」

「奇遇だな、俺も本屋に用事がある」

「季野君と同じなんて嫌な奇遇だなー」

本当になんて嫌な……。私は、罪はないけど反射的に秋を睨んだ。喧嘩になりそうな雰囲気を感じてか春香が言う。

「冬音は、ともかくあたし達の家は、学校を出て右だよな？」

「俺達は、本屋に寄ってから帰るけど、春香達は、どうするんだ？」

「俺達って…一緒にしないでよ！」

「いや、一緒だろ」

秋の一言一言についムカついてしまう。そして口論になる。

「えーと、あたしは真っ直ぐ帰るかな…あんまり遅いと親が心配するし」

口論している私達に聞こえるよう、春香は大きな声でそう言った。

「僕も春香と同じ」

「そうか」

一旦口論を止めて、秋も頷く。春香が鞆を持ったので続けて私も鞆を持った。

学校を出て私達は左に、春香達は右に曲がった。春香が振り返ったので私は大きく手を振った。

すると、春香は恥ずかしそうに小さく手を振り返してきた。

「ああ言つのが可愛いのか…」

なんとなく納得してしまう。

「ほら行くぞ」

ポーっとしていた私を秋が促した。うなが

「季野君も春香が可愛いと思う?」

「当然だろ? 春香こそ理想の女の子だ」

「へえー…」

そこまで自信満々に…。それにしても脈ありかもしれないよ? 春香。

無事、本を買えて私は満足した。なのでとてもご機嫌

「本、季野君は買わなかったね?」

「ん? 買うなんて言ってないだろ」

「ああ…そういえば…」

思い返すと言ってなかった気がする…。

「じゃあ、見たかっただけか…」

「その通り、じゃあ俺こっちだから。松永なら一人でも大丈夫だろ
う?」

「私ならってどどういう意味だ」

私がそう言った後にはもう秋が行ってしまった後だった。

なんて奴だ！確かに私なら大丈夫だけど！

……もし、私が春香みたいな子だったら……本を買うのに付き合ってくれたのだろうか？夏騎くんは……。秋は別にどうでもいいや。

そう考えてから私は家へと向かった。

続きます。

第七話 トキメキと変化と虫と…

朝早くにあたしは、早く秋と会いたくて冬音が家に迎えに来るのを忘れて季野家へと向かっていた。

たぶん…いや、絶対あとで冬音に怒られる。そんな事を考えつつも季野家のチャイムを鳴らした。

少し待っていると寝癖の付いた髪をした秋が出てきた。キヤー！激レアだ！

「春香？どうしたんだ？こんな時間に…」

「うん、たまには秋達と一緒に学校行きたいから」

「そうか…ちょっと待ってる。すぐに仕度する」

そう言うと秋は、ドアを閉めた。その後冬音が歩いて当然のようにあたしの横まで来た。

そしてあたしの頭に一撃入れる。感想…真顔で怖さ倍増しです。

「イター…イタごめんなさい」

「何、痛いのごめんなさいを合体させてんの？」

「と言っかなんで冬音、分かったの？」

「春香が私より優先させるのは双子だから」

それもう、当たり前になっちゃってるんだ…。会話が終わった頃に秋が出てきた。そして、冬音に気づく。

「どうしたんだ？こんな時間に…」

秋があたしに対して言った言葉は、ここまで一緒だけれど…。

「幽体離脱して魂だけ来たのか？」

「私、どれだけ器用なのさ！そして朝に私がいるのがそんなに意外か！」

「意外だ」

「ハッキリ言っただけ！こいつハッキリ言っただけ！」

本当に秋は、冬音が好きなのだろうか？完全に犬猿の仲なのですが…。

「幽体離脱と言えば…最近幽霊が校内に出るって噂だよ？」

「幽霊？」

冬音が興味深そうに聞いて来る。夏騎も来たので歩きながら話す事にした。

「校内の中を女性の幽霊が授業中に歩き回ってるのを見たって生徒がいるの」

「教室からよそ見すれば見えるからね？」

「うん、だけどサイエンス部が関わってるみたいなの」

「サイエンス部…？」

それを聞くと、冬音が腕を組んで考え始めた。そしてあたしを見る。

「サイエンス部なら知り合いいるよね？」

「え？あつ…顔見知り程度の知り合いがいるよね」

あたし達の会話を聞いて、秋と夏騎は首を傾げた。彼女に会ってないから当然と言えば当然だけだ。

昼休み、サイエンス部の部室を覗くと、彼女：冠風さんがいた。冠風さんがあたし達に気づいてこちらに向かって来る。

「どうしたんですか？春香さんと松永さんと…」

冠風さんは、視線を秋に移している。あれ？もしかして…。

「例の幽霊についてなんだけど…」

「ああ、噂になっている彼女の事ですね？幽霊なんて失礼ですよ！状況がイマイチ分からず、あたしと冬音は顔を見合わせた。そして冠風さんを見る。」

「知り合い？」

「知り合いと言うか：サイエンス部の部員ですよ。ちょっと影が薄くて誤解されやすいけどいい子なんです！」

「そうだったんだ？」

今回の件は、そんなに不思議でもなかった。影が薄いだけの子だっただけ…。なんだか、拍子抜けした気分。

まだ昼休みが終わるまで時間があるので、あたし達は校舎裏へと行って見た。校舎裏には大きな木が並んでいて、昼ご飯を食べるのに最適な隠れスポットなのです。

「どうするの？木の近くで食べてて虫落ちてきたら」

「虫!？」

「春香を怖がらせるような事言つなよ…」

「本当に落ちてきたらと思っただけじゃない！」

なんか朝と同じ…いつもと同じだな。これ、秋が冬音を好きな可能性ないかも…。

でも夏騎が嘘を吐くはずないし…もしかしてからかわれた？

冬音と秋を見ていると、ふと、あたしの頭に手が伸びてきた。

「え？」

思わず後ずさって身構える。夏騎が呆然とあたしを見ていた。

「えっと…葉っぱが頭に付いてたから…ごめん。嫌だった？」

「ううん、ありがとう」

うわー、撫でられるかと思…って違う！なんであたしが夏騎に撫でられたいの？どちらかと言えば秋に撫でられてほしいはず…。

いやいやいや！なんでこんな恥ずかしい事、まず考えてるの！？自分でも顔が赤くなるのが分かった。

「どうかした？顔、赤いけど…」

夏騎が顔を覗き込んで来るので、益々（ますます）顔が赤くなる、熱くなる。

「そこの二人！」

冬音が叫んだので、驚いたあたしは冬音を見た。夏騎も同様に冬音を見る。

そういえば、冬音って夏騎の事好きだったけ……。だから近づき過ぎて怒られた？

「じゅめ「上！二人共、上見て！」

謝ろつとするあたしの言葉を遮り、冬音は叫んだ。首を傾げながら

も上を見ると…。

「い……イヤ……！」

もうダッシュで冬音の元へと走り背中に隠れる。夏騎は、ゆっくりとこちらへ歩いて来た。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃない！だって虫……」

そう、あたしの頭上数センチの所までクモが迫ってきていたのです。冬音が気づいて叫んでいなかったら今頃あたしの頭にクモがいただらう。

「怒られるかと思った……」

「なんで？」

「なんでって……」

近くに夏騎がいるので、冬音の耳元に近づいて言った。

「だって、冬音は夏騎が好きなんでしょ？」

「…まさか……」

「え？違つなの？」

あたしの方が驚いてしまう。好きなんじゃないの？

「違う違う!」

「そうだったんだ…」

「だから怒らないよ」

そう言って冬音は笑った。だからあたしも笑い返した。冬音の笑顔に安心して、それがもしかしたら嘘かもなんて考えなかったんだ。

!

続くよ

第八話 部と友達とクツキーと…

最近、あたし達に新しい友達が出来ました。彼女の名前は、冠^{かん}風^{なぎも}紅^{こう}葉^は。同じ学年の四組の子です。

これが、また秋を好きらしくて…。行動がとにかく大胆なんです。何故か鈍感と言われるあたしでも分かる程、積極的で…。

「なんだろ…好きオーラが滲^{にじ}み出てるよね？」

「滲み出てる程度じゃないよ。もう全開だから」

「冬音、アレは全開なの？」

「全開だって言ってるじゃん」

今、冠風さんが秋の隣で親しく話をしている…そして何気なく腕を絡^{はた}ませている。傍^{はた}から見れば恋人同士のようにさえ見えてしまう感じ。

「…て言うか、何であいつは抵抗しないわけ？すごい冷や汗かいてるし」

「秋は、優しいんだよ…だから振りほどく事が出来ないの」

「私には優しくない…」

「それは…」

それは…冬音が一々突つかかるからで…：…なんて言ったら冬音は怒るかな？そう思いながらあたしは冬音の顔を覗き込んだ。

冬音は、目を見開いてから微笑んだ。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもない」

あたしに微笑む事が出来るのに…：…どうして冬音は、秋に対してだけ笑わないのだろう？何故怒ってるの？秋に何かされた？されたなら口も聞かないか…：それ以前に冬音は、嫌がらせとかする方だな。

「ボーっとしちゃって…：…そんなに見てるの辛いなら邪魔しちゃえばいいのに」

「辛くないよ？」

本当に何故か辛くない…：…なんで？あたしは、首を傾げて秋と冠凧さんを見つめていた。

「あつ季野くん…」

「え？」

冬音が後ろを向いて言ったのであたしも後ろを見る。…：夏騎が別のクラスの女子と楽しそうに並んで歩いていた。

ただ、それだけの事なのに、あたしの胸が痛む…：…なんで？今日は、なんで？が多い日だなー。

「冠風さんって…季野くんの事が好きなんだなー」

「え？見れば丸分かりだと思っただけど…」

「違う違う、季野夏騎君の方だよ。自分を見てほしいから柄にもない事して気を惹こうとしてるの」

本当に…そうなのかな？だとしたら…利用されてる秋が可哀想…。

「まあ、本当に好きだって可能性もない訳じゃないし…」

「でも…違ってたらず？本当に夏騎を好きだったらず？」

あたし、なんでこんな事を聞いてるんだろう…？あたしが好きなのは、秋で…夏騎じゃないのに…。

「春香…？」

「ごめん…こんな事聞いて。じゃあ、もう行くね？」

「え？ちよつと…春香？待って！」

後ろから呼び止める冬音の言葉を聞き流して、あたしは教室へと走った。

どうしてあんな質問をしてしまったのだろうか？別に…好きじゃないの…。

好きじゃないのに…。

「春香？」

後ろから…冬音の音が聞こえたのでゆっくり振り返ると、冬音が心配そうにあたしを見ていた。

追いかけて来てくれたんだ…。

「どうしたの？いきなり走り出して」

「だって、変な質問しちゃったでしょ？」

「全然変じゃないって！友達がどんな子に好かれてるのか気になるのは、変じゃないよ」

そうだ…友達なんだもん！誰に好かれてるのか気になるのは、当然！

「そう…だよな？」

「そうそう！」

なんだか変な納得の仕方をしている気がする…。

それから放課後…。夏騎は来たのに秋は、まだ教室に来ない。

「遅いよね?」

「そうだね。季野くん、何か知らない?」

「えーと…確か、冠風さんに呼ばれてサイエンス部に行くとか…」

冬音とあたしは、顔を見合わせてから夏騎を残して教室を出た。もちろん行き先は、サイエンス部。

「冠風さん、秋に何の用だろう?」

「さあ?」

…サイエンス部に着いて、あたしと冬音はドアの隙間から覗き込んだ。意外と近い場所に二人が居たようで、話が聞き取りやすい。

「あの…これ、良かったら」

「…ありがとう」

秋は、冠風さんから何かをもらったらしい。生憎、あいにく死角となる場所に秋達がいた。

「何、もらったんだろう?」

「冬音、後で聞いてきてよ!」

「なんで私が聞きに行かなくちゃいけないわけ?」

言っと思った…けど、冬音は気になって絶対聞くはず！あたしは、そう信じたいね！

「じゃあ、春香達待たせてるから」

秋がそう言っつて、徐々にあたし達のいる方へ歩いてくる。あたしは焦って冬音の制服の裾を掴んだ。

「どうしよう！来る」

「逃げるしかないだろ」

そう言っつた後に冬音は、あたしの手をひいて走り出した。教室に着いた時、冬音は息を切らして…。

「気持ち悪い…」

「大丈夫？冬音、運動苦手だっけ？」

「運動っつて言うか…普段あんまり…体力使わないから…」

冬音は、椅子に座って机にうつ伏せた。あたしも椅子に座って休憩する。

「体力ないんだね？」

「春香の体力があり過ぎるんだよ…」

そう言っつた後、教室のドアが開いて冬音は顔を上げた。もちろん、入ってきたのは秋だった。

「悪い、遅くなった」

秋がドアを後ろ手に閉めながら、そう言う。すかさず秋が手に持っている物に冬音が視線を移す。

「その手に持つてる物、何？」

予想通り、冬音が秋に貰った物を聞く。こう言う時にいる冬音は本当にありがたい。

「これか？さつき冠風に貰ったんだ。クッキーみたいだな」

「へえー？冠風って「さん」付けないんだー？」

「特に深い意味はない」

そう言うて秋は、クッキーの入った袋を鞆に入れた。冬音は、疑うような目で秋の様子を見ていた。

誰も想像なんてしていなかった…。冠風さんがあたし達の思いを変えてしまうなんて…。

続く。

第九話 料理とお菓子と睡眠と…

只今、家庭科の時間…のはずなのですが…。ちなみに作っているのはカップケーキ。

「春香…これ何？」

「作った本人も分からない物をあたしが分かる訳ないじゃない？」

「いや、だって聞かずにいられないでしょ？」

今、あたしと冬音の目の前には、黒と紫の混ざった、明らかに美味しく頂く事が出来ない物体があった。スプーンですくって見た感覚は、ゼリーとドロドロした物の中間辺り位。

そしてそんな物体を作り出したのが冬音だ。本人もこれ何？って聞いちゃうような得体の知れない物、作るなんてある意味才能だよ。

…あたしは、そんな才能欲しくないんだけど…冬音も欲しくなかっただろうな…。

「男子でも、もう少し原型は留めてるよ…」

「分かってる…もう言うな…何も言うな…」

「それでどうするの？捨てる訳にもいかないし」

家庭科の先生は、食べ物で粗末にするのが大嫌いで作った物には自己責任と言う先生だ。焦げてしまって食べられる所だけ食べて、焦

げの部分だけを捨てるなら良し。

美味しくないし、第一健康に影響が出そう…。

「ち…チャレンジ…何事もチャレンジ…」

冬音がそう呟きながらスプーンに手を伸ばす。その冬音の手をあたしは必死で止める。

「もうその心意気だけで勇者だよ！だから止めて！命を無駄にしな
いでー！」

「じゃあどうしろって言うのさ？」

やや乱暴にスプーンから手を離す。あたしも冬音の手を離した。

「誰かに…あげてみるとか？」

「私、まだ刑務所には入りたくない」

「大丈夫！何事もチャレンジだよ！」

「人に迷惑かけるくらいなら私が……ちょっと待てよ…」

腕を組み、冬音はニヤリと笑った。これは…絶対秋に食べさせる気だ！この人、秋に容赦なしだもん！誰にも止められないよ！

「季野君達に食べさせよう」

「やっぱり…ん？」

あれ…？ちよつと待ってよ…？今「季野君達」って言った？「達」って言ったよね？まさか…二人共に食べさせる気か！ああ…毒牙が夏騎にまで及んでいる…。

「秋が食べて大丈夫だったら夏騎君にも食べさせる」

「毒見役なんだ…随分命がけな…」

「それに…秋には一番に食べて欲しいから…」

え…？もしかして…これは…。

「私がこの物体を無駄にしない為にも！先生、怒ると怖いからな！」

「だろうね」

少しでも秋に好感を持っているのかもと思ったあたしがバカだったよ…。

そんな訳で放課後。秋達にカップケーキを持って行く所です。丁寧にラッピングしたし、冬音のカップケーキは箱に入ってるし。さすがにラッピングして持って行くのに半透明の袋は…。

「秋、夏季？」

教室を覗いてみたけれど二人の姿は、なかった。もう放課後だから

あたし達の教室の方に行ってしまったのかな？

「あら？節中さんに松永さん。どうしたの？」

「本井さん！秋と夏騎、知らない？」

「それなら一組で寝てたわよ？あまりにも可愛い寝顔だったからつい見惚れちゃってたの」

「ありがとう。じゃあね」

冬音が素っ気なく言っただけ先を歩いて行く、あたしも慌てて着いて行った。冬音は、本井さんに好感を持ってないらしい。

あたしは、結構好感を持っている。積極的な所とか…魅力的な所？憧れてるんだよね、密かに。だから冬音には内緒なんだよね。

一組を覗くと秋が寝ていた。夏騎は、窓側の席で本を読んでいる。絵になるなーでもおしい！本が逆さまだ…。

「カップケーキ、家庭科の授業で作ったんだけどいる？」

「秋には？」

「いや…命の危機が去ってから渡すよ…」

その言葉に夏騎は首を傾げたけれど冬音の持っている箱を見て、悟つたらしい。

「じゃあ、起こす？」

「秋って寝起き良い方なの？」

「……………」

夏騎が無言で目を逸らすつて事は、余程悪いのか…。それを冬音に伝える前にもうこの人は…。

「起きろー」

そう言いつつ、二・三回腕をバシバシ叩く。あたしの見た限りではだから…見る前に何十回もかもしれない…。起きた秋の反応見れば分かる事だけど。

「…春香のカップケーキが今ここに……………あつ起きた」

「松永…春香のカップケーキを…」

「これ食べたらあげるよ」

冬音は早速、箱を秋の目の前に置いて開ける。中から出てきた物体は、夏騎と秋を唾然とさせるほど奇妙な物だ。

「食べれば勇者つて呼ぶけど、食べれなかったらヘタレつて呼ぶから」

「命がけじゃないとそんな仕打ちか…」

「では、行ってみよー!」

いつになくテンションの高い冬音を遠巻きに見るあたしと夏騎。夏騎は、哀れそうに秋を眺めている。

「すごいテンション…」

「いつも負けてる仕返しをする絶好のチャンスだからね…」

その言葉にあたしは、ただ頷く事しか出来なかった。あれ食べれたら本当に勇者だわ…誰も食べようなんて思わないもん。

本人は食べようと頑張ってたけど、あたしが止めちゃったし…。もしかして止めなければ秋の命は助かった？

「なんだが大変な間違いをってしまった気がする…」

「よく見ると美味しそうだね」

「夏騎…そう言つの無謀って言うんだよ？」

そんなあたしの言葉を聞いたのか聞いてないのか、夏騎は物体の近くまで行きスプーンを取って一口食べた…食べてしまった…。

「嘘—————！」

「へタレがさつさと食べないから…」

「俺の所為せいなのか！？もうへタレって言うてるし」

「何？チキンの方がいいの？それとも、もやしっ子？」

また二人のいつもと同じ口喧嘩が始まった。いつもは特に気にしないけれど夏騎が物体を口にした途端に倒れてしまったので止める他ない。

「そんな事、言ってる場合じゃないでしょ！夏騎が…夏騎がー！」

「私の料理ってそんな破壊力があるのか…！」

「自分で関心してる場合でもないでしょ！」

とりあえず夏騎の体を抱き起こしてみる。息はしているようで、一応生きているみたいだ。

「寝てるだけみたい…睡眠薬でも入ってたのかな？冬音、物体に何を入れたの？」

冬音のカップケーキレシピ 注意…皆さんは絶対にマネをしないでください。

・バター ・砂糖 ・卵 ・小麦粉 ・ベーキングパウダー ・塩
・コショウ ・りんごを摩り下ろした物 ・バナナ ・生クリーム
ム ・唐辛子^{トウガラシ} ・シナモンシュガー ・パンの耳 ・サクランボ
ニンジン

…をテキストにミキサーへ少しづつ入れてオーブンで温めれば完成。

「睡眠薬なんて入れてないけど？」

「確かに睡眠薬は入ってないけど他の物入ってるよね…唐辛子とか何故入れる！ニンジンも何故入れる！」

「生クリームは普通、カップケーキだとトッピングに使う物だろ？」
「……………」

冬音は、物体に目を向けると素手で掬^{すく}って一口食べた。両手でいったので一口…と言っていいのかどうか…。

「美味しくない…けど不味くもない？と言うか味が無い…」

「え？じゃあ、夏騎が倒れたのは？」

「松永さんのカップケーキ…の所為じゃなさそうね？」

そう言ったのは本井さんだった。いつから聞いていたのか腕を組んであたしを見下ろすように立っている。あたしが座ってるから当然見下ろす形になる訳だけど…。

「睡眠不足つてとこかしらね？昨日、夜更かしでもしてたんじゃない？」

「あの…本井さん、いつから？」

「夏騎君が倒れた辺りからよ。松永さんのレシピは彼女以外使っちゃダメだわ」

物体を気まずそうに見ながら本井さんは、夏騎に視線を戻した。

「グッスリ眠っちゃってるみたいだし、秋がおんぶして家まで帰るしかなさそうね？」

「ハア…。分かったよ」

二人分の�を持ち、秋は夏騎をおんぶした。それを本井さんが面白そうに見ている。

「夏騎をおんぶしたままじゃ、ゆっくりだと辛いよね？」

「悪いな。今日は夏騎を夜更かしさせないようにする」

そう言ってから急ぎ足に秋は、教室を出て行った。それにしても、冬音の物体が無害なのは驚きだ。

黒と紫が混ざったような色をして味がなく、そもそも黒や紫の物など入れていないのにあの色なのだから。

「あたし達も帰るとしますか？」

「そうだね」

「私も一緒にいい？」

「もちろん！」

この日、初めて本井さん…桜と一緒に帰った。話してみると意外に気さくで冬音の警戒心も少しだけ解けたようにあたしには見えた。

そして次の日、冬音が腹痛で学校を休んだのだけれど…なんとなく原因が分かっているのだった。

* 続く *

第九話 料理とお菓子と睡眠と…（後書き）

今更ですが、よければ感想などいただけると嬉しいですよ。

感想があったりすると、もうその日一日イイ事がありそうな気になつたり…。

ハッキリ言うと単純です（笑）

こんな私の作品に良ければ感想など、お願いします^^

第十話 お見舞いとノートと腹痛と… side 冬音

昨日のカップケーキこと物体を食べた所為せいで今日は学校を休まざるを得なかった。味がなかったから大丈夫だという根拠のない自信が災いしたのだろうか？

でも、春香の話によると夏騎君は大丈夫だったらしい。もしかして秋に仕返ししようとした罰が当たったのか？

時計を見てみると、もう春香達が学校を出たと思われる時間になっていた。お見舞いに来るって言うてたし…もう少し待ってればいいか…。

そう思った直後にチャイムが鳴った。確か…お母さんはお茶会に行つてて、今家にいるのは私と……。なんでこんな時にお母さんいないわけ？お母さん、戻って来てー！

そんな私の願いが届くはずもなく、ついにあの人がドアを開けてしまったらしい。少しの無言が続いた後、春香達の「おじゃまします」の声が小さく聞こえた。

私の部屋は、二階にあるので階段の軋きしむ音が聞こえて来た。そしてドアをノックする音が聞こえてドアが開く。

「冬音、大丈夫？」

春香のその問いに答えず、私は逆に聞いた。

「会った？玄関で会ったよね？無言だったし…季野君達の顔がなん

となく赤くなってるし…」

「えっと…今のは？」

「私の姉…」

そう、私には四つ年の離れた姉がいる。職業は、モデルだ。モデルとしては少し有名ならしい。よく知らないけれど…。そして私の姉にはかなり困った事がある。

「いつもあんな格好してるの？お姉さん…」

「外ではさすがに…でも家の中じゃ、あんな格好だし普通に宅配便とか来ても出るし…」

姉の困った事は、家で、ものすごい薄着だと言う事だ。今の季節は夏ですかー？と思わず聞いてしまうほどの薄着だ。そしてその格好で恥ずかしげもなく出るものだから…。

「お母さんが入れれば出てくれるんだけどね…今、お茶会に行っていないんだ」

「そうだったんだ？あつそうだった！」

何かを思い出したように春香が鞆の中を探る。学校から直接来てくれたらしく三人共制服だった。なんだか申し訳ない気持ちになる。

「はい、今日の授業ノート！休日にもた見せに来るからその時写してね！今じゃ辛いでしょ？」

「いや、大丈夫だよ。病院にも行って来て薬飲んだから。心配してくれてありがとう」

「冬音……」

なんだか周りがキラキラし始めた気がするの……私だけだろうか？
雰囲気を変える為に私はノートを春香から受け取り見てみた。

「そのページが今日の授業の所だよ」

「へ……へえー？」

字は、女の子らしい丸い感じの字だった、読みやすくもいいのだけれど……このページを埋め尽くさんばかりの可愛い動物の絵や四コマは、どうにか出来ないのだろうか？すごい邪魔なんですけど……。

けど口を滑らせてハッキリそんな事を言えば「ご……ごめんね？あたしの絵の所為で……」と悲しそうな顔をするに違いない。それに秋がまた何か言いそうで面倒なので言えそうにない……。

「そうだ！秋と夏騎のクラスの方が授業進んで、ノート持ってきてくれたんだよ！わざわざ家に帰って」

「そうなんだ？」

助かった！夏騎君！ついでに秋にも助かったと言っておこうか。夏騎君と秋からノートを受け取り読んでみる。

「……………？」

「どうしたの？」

春香が首を傾げて私が見ている夏騎君のノートを覗き見る。

「ん？」

夏騎君のノートは、なんと言うか綺麗なんだよね？悪い意味で…。綺麗なんだけど…。文字がじゃなくて…。

「何も書いてないのですが？」

ノートを閉じてから私は夏騎君に聞く。夏騎君は、特に気にしてない様子でこう言った。

「だって授業自体聞いてないし…」

「じゃあ渡さなくていいじゃない？なんで期待を持たせるような事するかな？」

そうだった…。夏騎君も春香と同じで補習と赤点の常連なんだっけ？こうなったら秋に期待するしかない！ムカツクけど…。

期待とムカつきを抱きながら私は秋のノートを捲^{めく}った。そのノートは、文字も綺麗でよくこんな綺麗な字が書けるなーと関心した位だった。

重要な点には、しっかりとマーカーで印が付いていたりしている。ゴチャゴチャしていなくてスッキリとしているノートだった。

少しだけ…。いや、かなり悔しい…。けど…。

「季野君のノートを写すよ」

「ええー？なんで？」

「一番スッキリしてるノートだから。私のノート、取って？」

春香は不満そうだったけれど、しぶしぶでも私のノートを取ってくれた。イイ子だ…でもこれ位でイイ子なら世の中イイ子だらけになるんじゃない…。

「どうしたの？ノート、写さないの？」

「え？写すよ」

写すのにそう時間はかからなかった。七・八分位ですぐに終わった。

「じゃあ、お大事に！」

「三人共、風邪とかに気をつけてね」

「いつもは春香だけ心配するのに今日は違うんだな？」

「こつこつ日もあるさー！」

春香達を自分の部屋の前までだけ見送ってから再びベッドに横になった。六時ごろ、お母さんが帰ってきて、私は早速お母さんに言った。近くに姉もいたが直接だと負けてしまう。

「友達が来る時にお姉ちゃんに薄着で出ないでって注意してね！親

友の好きな人が今日一緒に来てたんだから、誘惑されちゃ困る」

「あら？冬ちゃんふゆの好きな子じゃないの？」

「…お母さん」今日の夕飯ゆいばん何？」

「まだ秘密よ」

鼻歌なんか歌いながら上機嫌でお母さんは台所へと向かった。私は姉に視線を移す。

「無理して言わなくていいのよ？お母さんだって毎日夕ご飯秘密にするんだもの。いつかサソリとか出して来そうね？」

姉はそう言っつて苦笑いをする。本当にありそうだから不安になる。

「ありがとう…」

「あんたがお礼なんて珍しいわね？いつ以来かしら？」

「中二以来だよ…」

誰だつって秘密はあると思う…けどお母さんの夕飯の秘密と私の秘密じゃ…重さが違ちがうと思った。

私は…

まだ親友である春香にすらその事が言えないでいる…。

続く。

第十一話 センチメンタルガール

冬音が腹痛を起こしてから二日後、元気になって登校して来た冬音を見てホツとした。お見舞いに行った時は無理をして元気に振舞っているのではないかと心配していたから。

そしてお見舞いの時のあたしのノートを見た冬音のリアクションを見て、ふと思つた事がある。なので昼休みに聞いてみる事にした。

「もしかして…あたしってバカ？」

「赤点取って補習の常連って事ではバカなんじゃない？」

「すごいハッキリ言うね…ちょっとあたしの心が折れそうだったよ…」

「春香が聞いてきたんでしょ？」

冬音は、呆れたように溜息を吐いた。あたしも反論したかったけれど事実なので何も言えない。

「でも春香はノートとってるだけマシだよ…白紙よりは…」

「夏騎のノート、白紙だったんだっけ？」

「夏騎君が何しに学校来てるのか、時々分からなくなる時がある」

「あたしも」

ノートが白紙なのに0点になった事が一度もないのでそれがまた不思議だ。授業は聞いてるけどノートには何も書かないだけなのかな？

「やっぱり賢い女子の方がモテるのかな？」

「賢い女子がいるとして性格が最悪だったら元も子もないじゃん」

「冬音、それを言っちゃ…」

ふと思った…二人も賢い子の方が好きなのかと…もしそうだったなら、冬音にあたしは賢さでは勝てないだろう。

「冬音って勉強好きじゃないのに出来るよね？」

「出来ると思う」

「否定はしないんだね…。それって何か秘訣とかはあるの？暗記とか…」

「ない」

考える素振りも見せずに冬音は即答でそう言った。あたしはただ呆然と冬音を見ていた。

「すごいバツサリ言った…」

「どつやら今の話によると春香さんは頭が良くなりたいですね？」

いつの間にか冠風さんがあたしの隣に座っていた。気配が全くしなかったのであたしは驚いたけど冬音の様子からして、気づいていた

のだろう。

「頭の良くなるポーションがあるんです。お使いになってみますか？」

そう言つて白衣のポケットから綺麗な青色のポーションが入っているらしい小瓶を取り出した。そして栓を抜いてあたしに近づける。

「どうします？飲んでみますか？」

「なんか…変な副作用とかないよね？」

「さあー？」

満面の笑みで冠凧さんは小瓶をあたしの手握らせる。この人、笑顔で恐ろしい事を言っている…もし副作用があったらどうするつもりなんだろう…。

とりあえず怖いのでこれ以上は考えない事にしよう。そう思い直してあたしは小瓶に入っているポーションを半分口に含んでみた。

あたしから受け取った小瓶の中身を確認する冠凧さん。そして大変な事に気づく。

「これ頭が良くなるポーションじゃなくて絵の具で青色に着色したただの水…」

「ブツ…」

思わず口に含んだ青色の水を吐き出す。目の前に丁度、冬音がいた

ので諸にかかってしまった。絶対に怒られるっ！

「あ…あの…冬音…さん？」

「春香…グスッ」

うわーどうしよう…泣かせた！？でも冬音ってこんな事でなくような程、繊細じゃないし…。原因があるとしたらあたしが吹いた水くらいだけど…。

「すみません。どうやらセンチメンタルになってしまっポーションだったようです」

「天然でワザとじゃないから、たちが悪い…」

「え？何か言いました？」

「うっん、別に」

今は冠風さんのうっかりの事を考えてる場合じゃない。なんたってあの、男子相手でも取っ組み合いの喧嘩をしたと言われる冬音がこんなに泣いているのだ。

そんな珍しい光景を夏騎達に見せない訳にはいかないでしょ！あたしは急いで三組に行き、二人を確保して一組に強制連行した。

泣いている冬音の姿を見て夏騎は呆然と立ち尽くし、秋は笑いを堪えていた。いまいち、秋の笑いのツボが分からなかったけど普段と違う姿を見て驚いたのは二人共、同じだろう。

「冠風さん、冬音戻せない？」

「飲んだ訳ではないので数十分で戻ると思います」

「それまではこの状態って事ね」

まだ薄っすらと涙を目に浮かべている冬音の前にあたしは座った。秋と夏騎は、どうすればいいのか迷っている様子だったので、あたしは隣に座るよう言った。

「ほら！泣かないで？心配して秋達も来てくれたし」

正確にはあたしが強引に連れてきたんだけど…。二人が来た事に変わりはないさ！冬音はハンカチが無いのか腕で涙を拭っている。

「なんか新鮮だな…松永が泣いてる姿」

「同感」

「二人共、そんな事言っていないで冬音をなんとかしてよ！」

冬音は泣き顔を見られたくないのか顔を二人から背けている。秋が立ち上がって冬音を見下ろした。

「えーと…大丈夫か？」

「大丈夫じゃないから泣いてる…」

「そっだよな…」

そこで一旦会話が中断されて、秋が言葉を発しようとした瞬間に冬音が涙を拭い鋭い目つきでこう言った。

「お前は泣いてる女の子にそんな分かり切った事しか聞けないのか。それはいつもの冬音の調子で、もとに戻ったのだとすぐに分かった。怒りを堪えて夏騎に宥められて^{なた}いる秋も、冬音が元に戻ってよかったです。思っているのかもしれない。

泣き虫のままできてくれた方が平和でいいとあたしは少し思っただ。

「それで、なんで双子まで一組にいるの？春香に何か用事？」

『え……』

どうやら、秋が話しかけた時くらいからの記憶しかないようです。それにしても、冬音はやっぱりこうでなきゃと思う、今日この頃でした。

*

続く

第十二話 割れ物騒動

今日は土曜日で特に用事もなく、まったりと過ごしている時に携帯が鳴った。電話だったのですぐに出なければいけない…行方の分からなくなった携帯を音だけを頼りに探していた。

正直言つてあたしの部屋は物が多くてゴチャゴチャしている。なので物を探すのにも一苦労…そんな中で携帯が見つかるなんて最早奇跡に近い。

そんな奇跡が起こった!と言つかあたしの制服のポケットに入ってた。なんで気づかなかつたんだろう…幸いな事にまだ携帯は鳴つたままなので、電話に出る。

着信相手は冬音だった。一体何の用なんだろう?休日でも一緒に出かけたりする事もあるけれど、あたしが誘う事がほとんどだ。

「もしもし?」

《春香?これから季野君達の家に行くんだけど、一緒に行かない?行くよね?》

「そりゃ、行くけど…」

《良かった!》

良かったってどういう意味だろう?と言つか声が近くに聞こえるのは、あたしの気のせいだろうか?その答えはすぐに分かった。

《もう春香の家に来てるんだよね》

「えっ!?!」

あたしは慌てて窓の外を見た。けれど冬音の姿がない。やっぱり出任せだったのだろうか? そう思っているとあたしの肩を誰かが叩いた。

あたしが振り向くとそこにいたのは…。

「キヤーーーーー!」

「うわっ! 驚かなくてもいいじゃん。可愛い悲鳴上げちゃって…」

心外だと言わんばかりに冬音が不機嫌そうな顔をする。あたしは携帯をポケットに仕舞った。

「誰だつて、さっきまで電話してた人が背後に立ってたら驚くですよ!」

「言ったでしょ? 春香の家に来てるって…」

「家の前にいると思ったよ。普通部屋にまで入ってきてるなんて気づかないし思わないし…」

冬音はあたしの部屋をゆっくりと見回す。

「それにしても凄い部屋だね…掃除してないの?」

「してるよ! 物が多くて…」

「そうなんだ？へえー…それでさ」

その事はもういいのか冬音は話題を変えた。あたしが今、一番気になっているのは冬音がどうして秋達の家に行こうなんて言い出したかだ。

「どうして季野君達の家に行こうって話になったかと言つと…」

「うん…」

「暇だったから、それでなんとなく…」

なんとなくで親友の家に来ちゃうんだもん…。あたしは、このまま冬音を帰す訳にもいかず、手っ取り早く仕度をして家を出た。

「春香って一人っ子？」

「うん、そうだよ」

「いいなー！やっぱり一人っ子だと親も甘いでしょ？」

「そんな事ない……よ？一人だと結構暇」

今…あたし嘔吐しました。あたしの親…すごい甘いです。親バカの域に軽々達しています。

秋達の家に着き、インターホンを押すと私服姿の二人がいた。新鮮

！特に秋が！目を輝かせていると冬音が秋達に聞く前に家へと入って行った。

「おじゃましまーす」

「ちょっと冬音！まだ聞いてないのに…」

「気にするな、松永が聞きもせずに入って来るのは予想出来た」

予想が当てられちゃう冬音って…。秋達も特に迷惑がってる様子でもないの、あたしも入る事にした。相変わらずの広い部屋に庶民（？）のあたしは何回来てもなれない。

夏騎と秋がお茶とお菓子を持って来てくれるらしいので、あたしは近くの椅子に座って待っていた。冬音はリビングの方へ行っていた。暫く経った時、パリンツと何かが割れるような音がした。音の方角からしてたぶん冬音のいる…リビングの方からだった。

あたしが一番に思った事…：もしかして、いや絶対冬音が何か落としました！…：だ。嫌な予感を感じながらもあたしはリビングの方へと歩いて行った。

「冬音…何か落としたでしょ？」

「第一声がそれ？確かに落としたけど…」

俯いて申し訳そうにしながら冬音は視線をしたに移した。あたしも続いて冬音の足元に視線を移す。そこには割れた食器があった。

少し高そうな高級感漂う皿で、どう言う訳で落としたのか検討もつかなかった。何故なら食器などは、ちゃんと食器棚に入っていて今は開いていない。

「なんで落としたの？」

「そ…それが…」

回想

「すごい広いなー、大型のテレビが壁に掛けてあるし！」

周りを見回る。そして暫くグルグルとテーブルの周りを回る。

「うわっ！」

テーブルの足に躓^{つまず}き、二・三步よろける。そして目の前にあった食器棚を開けて、一枚の皿に手が触れて落ちる。

「ああー…」

落ちた皿を見下ろして、とりあえず食器棚を閉める。そこへ丁度、春香が来た。

回想終了

「まあ…そんな感じ？」

「そんな感じじゃないよ…人の家の食器落とした時のリアクションだけ薄っ！」

「だって落としちゃったらあー…じゃない？」

「じゃない？と言われても…」

走って来る音がして振り返ると秋と夏騎が驚いたような慌てた表情であたし達を見た。そして夏騎があたしの元まで来る。

「大丈夫？怪我とかは？」

「いや…あたしじゃ…」どこも怪我してないみたいだね。良かった…」

この人…あたしの話聞かないよ…でもそれだけあたしの事心配して…ってなんでちょっとトキメいてるんだ…。困って冬音の方を見ると冬音は秋に謝ってから皿を片付ける所だった。

「素手で？」

「え？」

驚いた顔をして自分の手を見て、苦笑いをしながら冬音は秋に軍手を借りた。どうしたんだろう？冬音、自由人っぽいけど…しっかりしてるのに…。

なんとなく違和感を感じながらもあたしも皿を片付けるのを手伝った。

細かい破片を掃除機で片付けて、あたし達は一息吐いた。

「冬音が割ってごめんね？高そうだったけどいくらなの？」

「確か…五万位だったと思うよ？」

夏騎が言ったその値段にあたしは絶句した。皿一枚に五万もかけるなんて…さすがお金持ちと言うか…なんと言うか…。

「そんな高い皿を…」

「母さんは皿が多すぎて困るって愚痴を零してたから、そんなに怒られないよ」

そう言つて夏騎はあたしの頭に手を置いた。今日の夏騎は、なんだかあたしに優しい気がするけれど…それはあたしの気のせいなのだろうか？

「そもそもテーブルの近くに食器棚があるのがおかしい」

「おかしくないよ、取りやすく近くにあるのが当たり前だし便利だよ」

腕を組み、納得がいかないと言う顔で冬音は立っていた。今は完全に食器を割ってしまった事への八つ当たりだ。

それから暫くの間、雑談をしてあたしと冬音はそれぞれの家へ帰って行った。振り返った時に見えた、冬音の背中が…とても悲しそうに見えたのは…あたしの気のせいだったのだろうか？

今日は気のせいが多いなー…。そんな事を考えながら家に帰って行った。

翌日、冬音があたしの部屋にやって来て部屋の掃除を始めたのだけれど…。やっぱり気になってたんだ…。

続く*

第十三話 物体再び…？

土曜日の皿の事を冬音がお姉さんに言ったら…告げ口されてお母さんにひどく怒られたそうだ…当たり前だけど。そして後日、少しだけ気になるので夏騎に聞いてみた。

二人のお母さんの前の前の前の…以下略の夫から貰った物で捨てるタイミングに困っていたらしい。それを冬音に伝えたらホッと息を吐いた。

二人のお母さんを前に一回見た事がある。結構若く見えて三十歳後半くらいだと思ったけれど…本当は何歳なんだろう…。本人に聞くわけにもいかず夏騎に聞いたけれど年を聞いた事がないらしい。

結局、年齢は謎のままだった。そして今…これもあたしにとって謎としか言いようがない物が目の前にある。どうしてこうなるのか…作った本人である冬音にもよく分からないらしい。

「物体再び…」

「もう手の付けようがないわね？一体どうしたらこうなるのか知りたいわ」

「それを一番知りたいのは私…」

冬音の料理の腕の酷さに本井さんが呆れて、なんとか人並みに料理が出来るよう教えてあげているそうなのですが…。作ってみて出来上がったのが物体…？

ちゃんとレシピ通りに作り無駄な物も入れてないのに…。あたしと桜も冬音と同じ物クッキーを作っているのにどうして冬音だけ…？

「どうして腹痛が起こるような物、作れるのよ…」

「でも夏騎は食べても大丈夫だったよ？」

「あれじゃない？お母さんが料理下手で、私の作った物と同じような物を食べ続けて胃が強くなったとかじゃない？」

『ありえる…』

あたしと桜がハモってあたし達は顔を見合わせて笑い合っていた。けど同時に…冬音の作った物は胃が余程強くなければ食べる事が無理な物だと分かった。

「胃が強くないと食べれない物って…どんな物よ」

「これだよ、辛いから私に言わせないで…」

「どうしよう！いつになく冬音が弱気だ！大丈夫だよ、ね？桜」

ポジティブな意見をあたしは桜に求めた、けれど目を逸らして桜は、こう言った。

「そうね…私だったらこんな物を食べるくらいなら食用の虫を食べる方がマシだわ」

「そんなに！？そんなに嫌？」

「どうせ私の料理は虫以下だ…」

「あああ…冬音が段々ネガティブになってゆく」

あたしは近くにあつた自分のクッキーの前に見せる。冬音は、ゆっくりと顔を上げてあたしを見る。驚いたような…そんな表情をしていた。

「さすがに食べてあげられないけど…冬音にあたしが作った物をあげる。甘いもの食べれば少しは元気が出ると思う…」

最初は躊躇していたけれど、冬音は怖ず怖ずとクッキーを受け取り一口食べた。こんなクッキーで元気が出るなんて…冬音がそんなに単純じゃないのは知っている。

それでも、なんとか冬音を元氣付けたかった。そうしないと、いつまでも止まとどまってしまふ…料理をしようと思わなくなる。

それはダメだと思う。せつかく冬音に女性らしい事を見に付けさせるチャンスなんだから！男子と普通に取っ組み合いをして勝つてしまふ少し男勝りな冬音から脱出させなければ！

「ありがとう、でも私の料理の腕をどうやっても上げるのは無理だと思ふ」

「そんな事ないってば、桜もそう思つてしょ？…桜？」

あたしがそう聞くけれど、桜は考えるように俯いて物体を見ていた。あたしが首を傾げて桜に近づくと冬音も後ろから付いてきた。

「桜、どうかしたの？」

「秋に食べさせようとして結局、夏騎君が食べたのよね？これ」

「そっだよ？」

「そういえば、秋じゃなくて夏騎が食べちゃったんだよね……。でも夏騎が無事と言う事は秋も大丈夫って事になるよね。」

「一回食べさせてみない？夏騎君が大丈夫なら秋も大丈夫だと思うの。元彼女でも手料理は食べさせなかったから好みとかは分からないけど」

「でも一回失敗してるのにもう一度は……」

「ん？待てよ……。いいのか？好きな人に食べさせていいのか……。まあ元はクッキーなので問題ないかな。そんな訳であたしの中では秋に食べさせるって事で……。」

「少しの腹痛だけで食欲もあるし動くのも苦じゃなかったって冬音が言ってたし。病院でもそんなに大した事ないって言われて整腸剤貰っただけだったとも言ってたし。」

「あのさー、春香が作ったって言ったらあいつ何でも食べるよ」

「え……マジで？あたしの作った物なら？」

「マジで、前に春香からのプレゼントって言って姉の作ったシフォンケーキあげたら涙流して食べてた。だから実証済み？」

「果たしてそれを実証済みと言っていいのかしら…」

桜が言い出しつぺなのに心配してるよ…。とにかく、冬音の料理をあたしの料理だと言って食べさせる事に決定。

放課後にあたし達は三組に行ってみると、秋がまたうつ伏せて寝ていた。睡眠不足なのだろうか？前は夏騎が睡眠不足だった。

「秋、あたしが作ったのだけど…食べてくれる？」

あたしの言い方がすごい棒読みで内心ヒヤヒヤしたけれど秋は顔を勢い良くあげて、あたしから物を受け取り早速食べ始めてた。食べさせる事には成功したようだ。

そして食べ終わったと言うか…完食してしまった後の秋は何事もなく、またうつ伏せて寝始めた。その光景にあたし達は…ただ呆然と立ち尽くしていた。

これは成功と言っていいのだろうか？てか、そもそも成功の内に入るのか？

「……今、お前が食べたのは私が作った物だよ」

「そうだったのか？知らなかった…俺か夏騎で良かったな。他の人が知らないでこんな風に食べたら保健室行きだぞ」

「はいはい、もしかして母親が私と同じような感じで胃が慣れてしまったのですか？」

「…何で知ってるんだ？」

目を細めながら顔を上げて秋が冬音に聞いている。

「知ってると思うかそう思ったのですよ」

秋は目を擦り、鞆こぶを持って夏騎達と一緒に出て行った。あたしは少しだけ残る事にした。後からついて行くと言ったら冬音と秋は喧嘩しながらも渋々教室を出た。

なんだか二人、似たもの同士だな。そんな事を考えながら秋がつ伏せていた机を触る。

みんな気づいてなかったけど…親友のあたしには分かるんだ…。

冬音が突然敬語になった時は、本気で怒ってる時だ…。

続く

*

第十四話 不機嫌な理由 side冬音

春香に勉強を教える為に私達は休日に関書館へとやって来た。そこで夏騎君と秋も勉強していた。正確には勉強しているのが夏騎君で教えているのが秋だ。まあ、そんな事はどうでもいいけれど…。

手近な席に座り、春香の苦手な歴史から始める事にした。始めてまだ時間が経っていないのに春香の集中力がなくなってきた。原因は近くに居る秋か…。

「ほら、人を見てないで教科書見なよ」

「だって…つまらないんだもん」

「言っとくけど私だってつまらないから」

春香の集中力をもう一度教科書に移させて勉強を再開した。けれど、やはり秋に目が行ってしまうようだった。

「あんなの見て、何が楽しいの？」

「冬音にとつてはあんなのも、あたしにとつては好きな人なの！そりゃあ、見えて楽しいでしょ？」

「そんなもん？」

春香につられて…と言う訳でもないけれど私も二人に視線を移した。熱心に教える秋の言葉を夏騎君は完全に聞き流している感じた。

その事で秋がまた怒って…なんだかその気持ちが珍しく分かるような気がした。こんなに分かるのは本当に珍しい。今日、雪でも降るのかな…一応夏だけど…。

「ふ…冬音、冬音」

顔を引きつらせて春香が名前を呼び私の背後を指差す。何の事か分からなくて振り返ってみると…暗い？停電？でも春香の方は明るいし…私側だけ停電？そうか、停電か。

……つてそんな訳あるかつ！一人ポケッツコミしてても何も始まらないな。顔を上げてみるとムカツク眼鏡…秋がいた。

「さつきからこつち見て…何か用か？」

「用がなければ見ちゃいけないのか、友達を見てはいけないのか？」

「見たらダメとは言っていないだろ？何か用があるかと思ったただけだ」

そんな事を言われても用が全くない。なんか居たから何の気なしに見ただけだ。すると春香が手を挙げてこう言った。

「勉強教えて！」

「なんで？私、今の今まで教えてたじゃん」

「だって秋の方が分かりやすくていいもん」

「いや、どっちでも同じだから。私の方が分かりやすいんだから！」

「なんで張り合ってるの？どっちも同じならあたしは秋がいい」

なんだろう…この敗北感…。そんな虚しさを感じている間に春香はすぐに秋の隣へと座って行った。必然的に私が夏騎君の隣に座り勉強を教える事になりそうだった。

時計を見て一時間経った頃、後は夏騎君が問題を解くだけなので私は席を立ち、何か興味のありそうな本がないか探していた。ふと恋愛コーナーと書かれた所にある本で気になるタイトルの物があった。

【好きな人が親友を好きだったら】

他のタイトルと違ったストレートなタイトルに、私は思わずその本を取り読み始めた。その本の内容があまりにも自分の今の状況と似ていて驚いた。

【好きな人は親友が好きで、親友には別に好きな人がいて…】

まさに三角関係状態…いや、親友の好きな人を入れたら四角関係になるのだろうか？とにかく、この先の話は私は読まない事にした。

もし好きな人と親友が結ばれたと書いてあったら？そんな事が書かれていないと否定したかった…。何故かは分からなかったけどそう思った。

本を棚に戻して春香達の所へ戻ってみると、夏騎君と春香が倒れて

と言つか、もう何も出来ない位に疲れ切っていた。

その傍で秋が本を読んでいる。私がいけない間に勉強は終わったみたいだけど…。何があつた！と私は聞きたい…。

「一体何が…？」

「ああ、冬音聞いてよ。秋つてばスパルタ…こんな風にいつも勉強教えてもらってる夏騎は凄いよ…」

「言つとくけど夏騎君も春香と同じ状態だからね？」

秋のスパルタは、夏騎君も慣れないらしい。私は呆れて溜息を吐きながら夏騎君の隣に座つた。疲れ切っているようで熟睡している。

なんとなく見た、寝ている夏騎君の寝顔に不覚にもドキツとしてしまった。慌てて視線を逸らし、本を読んでいる秋を見た。正確には秋の読んでいる本に。

【猫の可愛い仕草】

思わず吹き出しそうに…

「ぶふっ…」

あつダメだ、吹いた。意外過ぎて笑わずにはいられない。でも図書館なので「ぶふっ…」で収まった訳だ。

「なんだよ…？」

「猫…可愛い猫って…」

「好きなんだから別にいいだろ」

そう言つて秋はまた本を読み始めた。ふと、春香の方を見ると…体を震わせて顔を腕に埋めて笑っていた。私よりすごい笑っていた。

「あっありえな…猫…猫…猫…アッハッハッハ！」

『じー』

「じっごめんなさ…」

注意されてもなお、春香は笑っていた。もしかして、ツボツたのだからか？さすがに私の笑いは、とっくに引いていた。

スパルタの後に猫なら、そりゃウケる…。意外性って奴？

私は、さっきの本が置いてある方に視線を向けて私にしか聞こえない声でこう呟いた。

私だったら譲るよ…と…。

続く

第十五話 風とセーター（前編）

外は風が強いようで砂埃が立っていた。今日の授業の中に写生があったのであたしは先生にこんな提案をしてみた。

「外は風なので写生は中止したらいいと思いまーす」

そう言ったら廊下に立たされた。めっちゃ説教されて立たされた。一体あたしが何をしたと言うのですか！別にそうしたらいいと思っただ事を言っただけなのに…。

と言うか今時、廊下に立たされるとは…。怖いくらい後ろから視線を感じる。だけど写生に使うスケッチブックと筆入れを持って来ていたので教室には、まず戻らなくても大丈夫だ。

それから暫くして授業が終わったのかクラスメイト達が教室から出てきた。みんなクスクス笑うのであたしは思いつきり睨んでやった。すると後ろから肩を叩かれたので振り向くと呆れ顔の冬音がいた。その冬音の姿の中で何か足りない気がしたけれどきつと気のせいなのだろう。

「まだ立ってたの？ほら、行くよ？」

「もう授業終わったんじゃないの？」

「もうって…さっきの写生についての注意事項とかの話だったんだ

けど…。聞いてなかったんだ」

冬音は溜息を吐くとあたしの腕を掴んでから歩き出した。あたしが授業中に考えていたのは勿論秋の事だ。クラスが違うけれど秋も夏騎も昼休みと放課後には教室に来てくれる。

ただどあたしは秋の事を四六時中見ていたい…授業が退屈だから息抜きにさ?…外に出てみるとやっぱり風が強くて夏だけれど肌寒かった。

「セーター持ってないんだよね…冬音は寒い?セーター持ってる?」

「私は平気だけど、季節はずれなのにセーターなんか持ってきてる訳ないじゃん」

「だよね…どうしよう?」

セーターが二人共ないって事は誰かに借りるか我慢?でもあたしは無理!セーターなしでこの肌寒さは耐えられない。

「誰かに借りるしかないね?」

「秋が夏騎君なら持つてるかもしれないよ?春香だったら喜んで貸すだろうから借りておいで」

「喜んでって…でもあたしが行くの?」

確かに秋のセーターが着れるのは喜ばしい事だしすごく着たい…だけ…。

「他のクラスも授業中でしょ？だとしたら教室のドアを開けた瞬間、先生と生徒達の視線があたしに集まるわけだよな？そんなの絶えられない！」

「すごいリアルで分かる…。でも、そしたらどうするのさ？」

「うーん…」

季節はずれでも寒くてもとにかく今は秋のセーターを着るのが最優先な訳で…。だからと言ってあの視線に耐えられる訳でもない…。どうしたらいいんだろう…。

「冬音が頼んで来てくれない？セーター貸してって…」

「別にいいけどお礼として駅前のだい焼き屋のクリームを十個買って貰う事になるよ？」

「ええー！？駅前のだい焼き屋さんは高いんだよ？」

駅前のだい焼きは一個でもただでさえ高いのに十個もなんて…。それにそんなに買ったらあたしの財布が寂しい事になってしまう！

それだったら自分でセーター貸してもらいに行った方が安上がりだよ！冬音もがめついな…。でも…。でもだからってセーターを借りに行つて先生や生徒達…。以下略なんて無理。

そんな事を考えていて、ふと冬音を見ると、しまった！と言つ顔で自分の手を見ていた。どうしたのかとあたしは首を傾げる。

「どうしたの？」

「スケッチブック忘れた…」

「そう言えば持ってなかったね」

気のせいがまさかスケッチブックとは…しかしあたしは廊下に立たされる前にスケッチブックを持ってきていたのです。けどあたしだけが持つても意味ないんだよね…。

どうした物かと考えていてある案が浮かんだ。

「冬音がスケッチブック取りに行くついでに秋からセーター借りて来ればいいんだよ」

「それなら私も春香も目的の物を持って来れるね。じゃあ行って来るよ」

そう言っただ冬音は学校へと取りに戻って行った。意外にもあっさりと戻ってしまったのであたしは少しの間、呆然としていた。

たい焼きより自分の道具の方が大切と言う事かな？食い気だけじゃなくて少しだけホッとしている。あんまり食べてると太っちゃうからね。

まあ、そんな事を言ったら前のように無理なダイエットを始めてしまっただろう。そして秋みたいなさっきの言葉を言えば…「春香が秋に毒された！あいつめ…春香になんて事を教えるんだ。女子に太るなんて失礼な、そのなんとなく健康を気遣ってる感じがまたイラつく…」と言った感じで喧嘩勃発。

そして二人の喧嘩を止める為にあたしと夏騎がまた苦勞するのだらう。喧嘩が起こった時の事を考えて深く溜息を吐いてからあたしは手近にあった設置されているベンチに座って冬音を待つ事にしたのだった。

* 続く *

第十五話 風とセーター（前編）（後書き）

今回は春香目線。後編は冬音目線です。

第十五話 風とセーター（後編） side冬音

春香のセーターと私のスケッチブックを取りに行く為に私は始めにスケッチブックを取り行った。まずは自分の忘れ物から取りに行こう。そうしよう。

それにしても今気づいたんだけど授業中にセーター借りる為だけに教室訪れるって絶対勘違いされるじゃん。私が秋を好きなのかなーとか。そんな事思われるくらいなら私、明日が地球最後の日だとして笑って過ごすわ。その方が勘違いされるよりマシだわ。

でもそうになると春香へのセーターどうしようかな？って事になるんだよね。だつてないと春香が凍える、凍ってしまふ。って言っても私はセーター持ってないし…そうだ…。

「…と言う訳でセーター貸して」

「事情は分かったけどなんで私の居場所が分かったのよ？エスパー？まさかストーリー……」

「そんな事に時間つき込むくらいならゲームを攻略するのに時間使う」

「言つと思つたわよ…」

溜息を吐いてから本井さんは足を組み直した。ちなみに本井さんがいたのは屋上前の階段の所。どうして居場所が分かったのかつて？そりゃあ、廊下を歩いてたらサボってる男子生徒が近くにいたから、ちよつと聞いたただだよ。

「でも松永さん、セーター無くても大丈夫そうじゃない」

「自分で言うのはいいけど人に言われるとムカツとするよね。私じやなくて春香が…」

「華奢なものね？いいわよ、ちょっと待ってて？」

そう言つて本井さんはスクールバッグを開けて中からセーターを取り出した。セーター常備！？いや、別に時々肌寒かったりする日もあるけど夏にセーター常備って…。

フリーズしている私を見て本井さんは首を傾げながら雑に畳んであったセーターをきちんと畳み直して私の前に差し出した。そこで私は我に返る。

「どうしたの？大丈夫？」

「あつ、うん。ありがとう」

「それにしても夏だつて言うのに肌寒い日が続くわね？」

春香の元へ戻ろうとした時、本井さんが話を振って来たので私は一瞬言葉を詰まらせた。本井さんは頬杖をついて屋上へのドアに小さく付いている窓を見ていた。

「……そうだね、本井さんも風邪とか気をつけて」

「あなたもね」

セーターを受け取り、本井さんに一度頭を下げたから私は改めて春香の元へと向かう。セーター、女子のもので良かったんだろうか？春香も華奢だけど本井さんも負けず劣らず痩せている方だ。だから体にフィットして秋のセーターじゃないってバレルかも……断言します…バレル。

そうだ、春香のセーターの前に自分の忘れ物取りに行こうとしてたじゃん。完全に忘れてた、春香のセーター問題の方が重大で完全に忘れてた。春香の元へ行く足をもう一度、一組に戻して私は小走りした。廊下は走っちゃダメだし走ると音で分かるから小走り。

あれ？小走りって走ってね？走りついてるし…って今はそんなのどうでもいい。一組の教室に着き、自分の机を見ると、やっぱり忘れ物が置きっぱなしになっていた。それを抱えて私は春香の元へ小走りした。もう走ってもいいかと思ったけど…なんか走ったら負けな気がする。

外に出てベンチに座っているらしい春香を見てみると死………んでいる訳もなくただ寝ていた。こんな肌寒い場所でよく寝てられるな…。そんな事に呆れながら春香を起こす。さすがに授業中だから…。

「ほら、セーター持って来たよ」

「ん…んん？あつ冬音ありがとー」

目を擦りまだ眠たそうにしながら春香はセーターを着ていく。そして寝起きでいつもは寝ぼけてるのに今日の春香は冴えていた。やっぱり私の予想通りだった。

「なんかフィットする…これ女子のでしょ？」

「今日の春香は冴えてるね…」

「知り合い以外から借りる訳ないから…本井さん辺りかな？冠風さんはサイズ合わない」

今日の春香は冴えに冴えていた。借りた人まで当てるなんて…恋は偉大と言つか怖いと言つか…。ここまで秋のセーターを求めているとは…。

「だって双子のクラスの授業妨害してまでセーター貸してなんて言えないでしょ？」

「うっ…行かなかったあたしには否定出来ない…」

渋々春香は本井さんのセーターで我慢して授業に参加する事にした。私の忘れ物も無事取って来れたし、とりあえず一件落着でいいのだから？いいな、もう面倒だから。

ちなみに春香の絵ですが…

「え…何それ？」

「……目の前に生えてる花」

「どう見ても花の怪物にしか見えないんだけど…」

どうやら春香は絵が苦手みたいです。と言つか苦手で収まりません

…私の料理と同じようにちゃんと目の前にある物を移して、またはレシピ通りに作っているのにモンスターが出来上がります。花なのに眼があつて口があつて…恐ろしく目つき悪いです。何もかもが尖っています。

それに比べて私は絵だけは得意で、もう見たまんまの絵。それを春香に言うと泣きそうになって半泣きになります。絵を描いて見せる時の春香は取り扱い注意。そう書いた紙、額に張ろうかな…。

張ったら絶対に怒られるけど…。

* 続く *

第十五話 風とセーター（後編） side冬音（後書き）

リアルでは今、秋？冬くらいですが話では夏です。

今更ですがクラス、春香・冬音が一組、秋・夏騎・そして何気に桜も三組、そして紅葉が四組。今気づいた、二組が誰もいない…。

そして最近サイエンス部の事件ないし部自体あんまり出てないです。

第十六話 目指せ！女の子化計画

最近、また冬音について気づいた事があります。それは…冬音が眼鏡フェチだと言う事。何故その事に気づいたのか？そこから話す事にしよう。

「冬音？」

「…ん？何？」

まず話しかけても上の空であたしの話を全然聞いていない。そしてフェチに気づく前は近くを通る男子をただ見ているだけだと思っていた。

しかし男子は男子でも眼鏡をかけた男子しか見てない事に気づいた。それが気づいた最大のキツカケ。別に何が好きでも構わないけど、人の話くらい聞いてほしい。

「話聞いてた？冬音」

「聞いてなかった」

「また聞いてないの？全く…」

さすがに、ここまで人の話を聞かないと呆れるを通り越して感心してしまう。あたしは冬音が見ている方向と同じ方を見た。やっぱり眼鏡男子がいる…。

「そんなに眼鏡かけた男子が好きなの？」

「いや、好きなのは眼鏡だけだから、男子は別に好きじゃない」

「そうなの？」

まあ、冬音が男子に興味あるって方が驚きだなー。もし、そうなら明日は嵐だ…絶対に。そういえば眼鏡で身近に誰かいたような気がするんだけど…誰だったかな？

あたしが首を傾げながら考えていると冬音が眼鏡男子…眼鏡から視線を外してあたしに視線を移した。そして頬杖をつき、一息つく。

「春香は秋のどこが好きなの？」

「いきなりだね、うーん…皆に分け隔てなく優しいところかな？」

「私には優しくないし、分け隔てしてるし…」

そう言っただ冬音はすねてしまった。と言うか自分だけ優しくされないのが冬音にはショックだったらしい。嫌われるのはいいけど優しくされないのは嫌って事？よく分からないなー。

「でも冬音が優しくされないのは当然だよ？いっつも喧嘩売ってるし…」

「秋に対しては大安売りしてるからね」

「うわー…」

もう…うわー…としか言いようがないよね？だって大安売りしちゃ

つてるんだもん。秋も大変だなー…もしかしたら冬音、会う度に喧嘩売ってるんじゃないの？

「会う度に喧嘩売ってるから優しくされないのも春香の言う通り当然だね」

当たっちゃったよ…あたしの予想当たっちゃったよ…会う度、喧嘩だよ。ああ…誰かこんな冬音を今日一日だけでも変えてください…。誰かいなかったかなー？親しくて女の子らしい…あつ…。

「つて事で桜が思いついたの。どうにかしてくれない？」

「親友だどこまでパターンが似るのね…まあ、いいわ。それです松永さんが女の子らしくするなんて考え付かないんだけど…」

「あたしも」

いつもクラスの男子と口喧嘩が取っ組み合いの喧嘩があたしと一緒にいるか…秋と喧嘩してるか夏騎を見てるか…女子が男子と喧嘩してるつてのが致命的なんだよね…。

「思ったんだけど…春香は何で好きな人が松永さんに優しくないからって松永さんを女の子らしくしようとしてるのよ？ライバルになっちゃわない？」

「だって冬音と秋が会うだけで一触即発だよ？そんな状態と好きな人が好感持つのとどっちが秋にとって安全かな？」

「なるほど…ちゃんと考えがあつての事なのね」

桜は納得したように腕を組みながら何度か頷いた。その様子を見て、あたしは更に続ける。

「これで冬音が女の子らしくなるチャンスかもしれないでしょ！それに喧嘩が起きてあたしや夏騎が仲裁する事もまず無くなるし」

「後者が本音つばいわね。それにしてもどうするの？内面は難しいけど外見からなら私にかければ容易いわ」

「本当に！？ああ…でもどうやって冬音を…」

今の事を…仮に『女の子化計画』とでもして置こう。その計画の事を冬音に話したところで乗り気になるとは到底思えないし、第一逃げ出してしまっただろう…。

さて、どうしたものかと悩んでいると桜がそんな事かと言うような表情でこう言った。

「私の家に服が沢山あるから…勉強会だとも言って連れて来なさいよ？なんなら秋と夏騎君も連れて来ればいいわ。その方が色々面白いでしょ？」

最後の意味深の言葉がよく分からなかったけれど、あたしは桜の言った通りにする事にした。ついでにあたしもオシャレにしてくれるそうなので迷う事なく了承した。

桜の家に向かう今、あたしと夏騎はなるべく秋と冬音を近づけないように必死だった。もう爆弾みたいなモノで少しの挑発と秋と冬音

が入ればいつでも爆発してしまう。

学校から直接向かうので制服のままだけれど、制服から可愛い服の方が感じが違っていていいだろう。秋が冬音に優しくなり喧嘩が無くなる&あたしにも好感が高まる事も大いにある。

まさに一石二鳥！世の中こんないい事が二つも同時に起こったりしていいのだろうか？まだ起こってないけど絶対にいい事だ。

家に着くと、普通の一軒家で安心した。桜まで秋達みたいな家だったらどうしようかと不安だったんだ…。ちなみに秋達の家は何度か行ってる今でも慣れない。慣れる人なんているのだろうか？秋達を除いてね？

「やっと来たわね、上がって？」

普段の秀囲気のようにオシャレで大人っぽいシックな服を着て、桜は出迎えてくれた。同性であるあたしが一瞬見とれてしまったのに秋や夏騎は顔色を全く変えていなかった。

もしかして私服にトキメかない方達なのだろうか？だとしたら、この計画は全くの無意味って事になるんじゃないの？

そんなあたしの心配を余所に桜はあたし達を自室へと案内した。あたし達は座布団に座って待っていたけれど、やっぱり冬音は落ち着かないらしく部屋ほウロウロしている。部屋を出ないだけ進歩してる…。

桜が戻ってきて事情を知らない…教えていない秋と冬音は鞆から勉強道具を取り出していた。夏騎には、とりあえず教えていたので座

布団に座ったままでいる。

そんなあたし達に冬音と秋は首を傾げている。すると桜が強引に冬音の腕を引っ張り部屋から連れ出した。秋は啞然とその光景を見て立ち尽くす。あたしも続いて二人を追いかけるように部屋を出た。

「一体どういう事が説明してもらおうか？」

不機嫌むき出しで冬音が腕を組みながら仁王立ちしている。そんな冬音に構わず桜は冬音とあたしに似合いそうな服をチョイスしていた。

「冬音、女の子化計画だよ」

「計画名じゃなくて何故本井さんが春香や私に似合う服を探してるのかって事」

「冬音を女の子らしくする為に…」

計画名まんまじゃんと溜息を吐きながら冬音は腕を組むのを止めて膝を抱えて座り込んだ。

「とりあえず春香はピンクの所々にリボンが付いたワンピースとかどうかしら？シンプルだけど可愛さもあるわよ」

「うわー！あたし、こういう服好きなの！ありがとう」

お礼を言ってからあたしはワンピースを受け取った。次に桜は冬音に視線を移す。冬音は膝を抱えて座り込んだままだ。

「じゃあ…松永さんにはギャップを加えてみようかしらね？」

桜はまた、意味深な言葉を言ってニヤリと笑った。本当にニヤリって効果音がつきそうなくらいのニヤリだった。

そんな訳であたしはワンピースを着て、先に部屋へと戻った。二人共、可愛いと褒めてくれた。そして少ししてから冬音が制服姿のままで戻ってきたのであたしは首を傾げた。

「さあ、松永さん。さっき言った通りにしなさい？」

そう桜に言われて躊躇しながらも冬音は…。三回グルグルと回って「ワン…」と赤く…なる訳ではなく青ざめた顔で、もうこの世の終わりだと言う顔をしていた。

「え…何…？」

誰のリアクションもないこの空気の中であたしが一番初めにそう発言した。随分リアクションに困る行動だ…。

「もうプライドスタスタ…」

「あら？プライドの代わりに得た物があるわよ…きつと…」

「きつと…って自分でも得た物について自信ないじゃない…」

冬音はどこからか持って来た毛布で身を包み、隅の方に行ってしまった。得た物なんて…あたしもないと思う。失った物の方が多そう

だな…。

「冬音もさ…断ればよかったのに？桜の提案なんて」

「女王の提案を却下なんて出来る訳ない…」

誰！誰が女王？もしかして桜！？一体あの短時間で何があったの！
？そう聞こうとしたけれど冬音は、また毛布を被ってしまった。

仕方が無くあたしの中では女王と推測する桜に聞いてみる事にした。
桜はジッと腕を組みながら立っていた。

「なんか女王の提案は断れないとか言ってるんだけど…一体何の事
？」

「ああ、私が冬音のお姉さんに電話して意見を求めたのよ。それで
ギャップと言えばに、ああ答えたの」

さっきやった三回ってワンの奴か…あれはギャップではないけれど、
その提案を良しとする桜も桜だな…。なんだろう？冬音はお姉さん
に逆らえないの？

この日、冬音の苦手な人が増えた。

お姉さんと桜だ。性格的にこの二人は似てるからな…ドンマイ…
冬音。

続く*

第十七話 勃発…二人の喧嘩 桜side

ある日、友達に言われた。どうして節野さんは春香なのに松永さんは松永さんなの？と…。自分でも何故かは分からない…。どうして春香は春香なのに松永さんは冬音じゃないのかしら？

そんな事を考えていると松永さんが目の前まで来て立ち止まった。私が今いるのは、屋上に繋がるいつもの階段の所だ。

「なんで私のいる場所が分かるの？」

「だってよくいるでしょ？階段付近に」

「え…ええ」

よくいるって言うてもサボる時とか暇な時とか、なんとなくとか…それだったらよくいるわね…と心の中で納得。

松永さんは少しの間、左右を見てから私の隣に座った。一体どうしたのかしら？用があるならハッキリと言う人なのに。

疑問に思った私は、首を傾げながらも松永さんに聞いてみる事にした。

「どうしたの？何か用かしら？」

「特に用はないんだけど…ちょっとね…」

苦笑い混じりにそう言つと「ごめん」と一言そう言ってから立ち上

がって何処かへと歩いて行ってしまった。

松永さんの様子がおかしいと首をまた傾げて廊下を歩いていると、どうやら様子がおかしいのは松永さんだけではなかったようだ。

一組の教室を覗いてみると、いつもはツインテールで結ばれている髪を下ろして、誰も近づけないようなオーラを放っている春香を見てしまったからだ。

どうしたんだろう？松永さんだけじゃなくて春香まで様子がおかしいなんて。戸惑いながらも私は春香に声をかけた。

「あ…あの、どうしたの？いつもと違うじゃない」

「そう？そんな事ないけど」

……会話が終わった…。絶対おかしい…。これはなんとしてでも松永さんに聞かないといけないわね…。そう思い、教室を出て松永さんが行った方へと歩いて行った。

松永さんを見つけた時、彼女は廊下の壁に寄りかかって座り込んでいた。私がいる事に気づかず溜息を何度も吐く。

「松永さん」

「……え？ああ、本井さんか…」

ホツとしたように安心した表情をしながら松永さんは、こちらを向いた。私は少しづつ近づいて松永さんの隣に座る。

「春香と喧嘩でもしたの？」

「なんで分かったの？…って言っても春香の様子見ればすぐに分かるよね」

「分かりやすいいわよね」

二人で苦笑しながら、私は松永さんに聞いてみる事にした。

「それで喧嘩の原因は何なのかしら？」

「すごいつまらない事なんだけど…」

苦笑交じりに松永さんは春香との喧嘩が起こる原因の話をしてくれた。

「まず始めに春香の机の中からクッキーが見つかったんだけど…すごい見た目もいいし美味しそうだったんだけど…春香が「誰？こんな物をあたしの机に入れた女子は！」って怒鳴って」

「男子って可能性は考えないのね？」

「自分はモテないって思ってる鈍感な子だからね」

松永さんも一応モテるんだけど…女子に…。なんだかそう言ったら松永さんは喧嘩の原因を話すどころではなくなりそうなので黙っている事にした。

「それで私じゃないかって事になって…」

「松永さんな訳ないじゃない！そんな美味しそうなクッキーを松永さんが作るなんて、死んでも無理な事だわ」

「それ結構傷つく…」

松永さんは俯きながらそう言った。なにかしら…春香と喧嘩している松永さんを見てると…女子の涙に弱い、良く言えば優しい…悪く言えば、女の尻に敷かれるタイプの男子を思い出すわ。

「それにしても喧嘩にまでなるなんて…クッキーの中に何か入ってたの？…危ない物とか…」

「チョコだよ…」

「チョコ？」

予想外の答えに私はもう一度繰り返してしまった。松永さんは溜息を吐いてから頷く。一体チョコでどうして喧嘩に発展するのかしら？

「春香はクッキーの中にチョコが入ってるのが大嫌いで…単品はいけど合わせるのが嫌らしいよ？しかもクッキー限定で…」

「食べ物関連からの喧嘩なのね？それでどうするの？あの様子じゃ早々に仲直りなんて難しいと思うけど…」

「とりあえず全力は尽くすよ…」

溜息を吐いてから松永さんは教室へと戻って行った。私はそれを見送ってから三組へと歩いて行く。勿論双子に相談するため。

「どうしたらいいと思う？」

「どうもこうも…二人の問題だろ？俺達がとやかく言う事じゃない」

秋はあんまり相談相手としては不向きなよう。しかし夏騎君は違いでしょ？と期待を持った目で彼を見る。

「僕はとりあえず春香の言い分も聞いてみたらいいと思うよ」

「そんな事言っても…完全に春香が勘違いしてるんだもの…意味無いわよ」

「あの二人なら知らないうちに仲直りしてるだろ」

秋は無責任にそう言って机にうつ伏せ寝る体制に入った。そんな秋を見て夏騎君が申し訳なさそうに苦笑する。

もうこの二人…特に秋には絶対相談しない…。私はそう決意しながら三組を出た。すると廊下の隅の方で春香と松永さんの話し声が聞こえた。

「…あのさ…あの…その…ごめんなさい…勘違いしてたみたいで…怒ってる？」

「怒ってると言つか…落ち込んだ」

「うう…ごめん…でも改めて考えてみたら冬音がクツキーをあんな

に美味しそうに作るなんて…死んでも無理だよね」

「同じ事を最近言われた…」

声からも松永さんが落ち込んでいるのが分かる。落ち込んでるけど本当の事だから仕方ないわよ…。とにかく仲直りしたみたいで良かったわ。

「でもどうして勘違いだつて分かったの？」

「だって、冬音が…親友があたしの嫌いな物を入れる訳ないもの」

「春香…今更分かったの？遅すぎだよ」

「えへへ…ごめんね？」

春香が松永さんに抱きつき嬉しそうに笑う。喧嘩しなかったらこんなに仲がいいのね…なんだかちょっと羨ましい…。

そう思いながら私は静かにその場所を離れた。

次の日…松永さんがクッキーを作ってきて春香に食べるよう言っていたけど…私まで巻き込まれそうだったのでいつもの階段付近に逃げました。これは不可抗力よね？

続く*

第十八話 過去の彼

昔…と言ってもあたしが高校一年生だった一年前の始業式…。あたしは自分のクラスを確認してから気がつく和学校内で高校生ながらに迷子になっていた。一応どこにどの教室があるかなどは把握しているけれど…。

それでも迷子になってしまったのだから仕方がないと開き直っていた。そして学校を正面から見れば自分の教室がある場所が分かると思ひ、外へ向かって走り出した。

今思えばそんな事しても正面にクラスが何組か書いてある訳でもないので、どっちみち分からないままだ。なんだろう…今より一年の時の方がバカな気がする…。

そんな訳でそこで自分の間違いに気づき走って校内へと戻ろうとした…それが悪かった。あたしは走った時に躓いてしまい当然のように転んだ。そんなに勢いがあったのかズササーと音を立てながら滑った。

それをどこからか見ていたのか一人の男子生徒があたしに苦笑しながら手を差し伸べてくれた。あたしは赤面しながらも彼の手をとる。

「大丈夫？随分派手に転んだね」

「すごい恥ずかしい…」

「手は大丈夫みただけど膝が怪我してる…はい、絆創膏」

「…ありがとう」

絆創膏を受け取ってあたしは膝に貼る。もしかして絆創膏を常備してるのかな？それとも偶然持ってただけか…。

「あの…名前！……あれ？」

あたしが両膝に絆創膏を貼り終わって顔を上げた時には彼はもうあたしの前から姿を消していた。あたしが絆創膏を貼るのに、もたもたしていたからいけないのだけれど…名前くらい聞きたかったと後悔していた。

あたしを助けてくれた彼は…眼鏡を掛けていた…。そしてあたしはその後、冬音に会い、さらに半年後、双子の二人と出会う。

「そんな訳で秋に恋をしたんだよ！前に会ってまた知り合えるなんて…もう奇跡でしょ？」

「え…うん…（秋の眼鏡を夏騎君が掛けていたらその時に会ったのが夏騎君って可能性もありえるけど）そうだね」

「そつでしょ？」

なんだか冬音がすごく言葉を飲み込んだ気がしたけれどきつと気のせいだろう。今は昼休み。冬音があたしが秋を好きになったキッカケが知りたいと言うので話していたところだ。

そんな訳で喉も渴いてきたし…あたしは自動販売機へとジュースを買いに向かった。ちなみに冬音に聞いたら「紅茶」と即答された。喉渴いてるけど行くのが面倒だったと思われる…。

自動販売機がすぐ目の前だったけど喉がかなり渴いていたのもあって、あたしはつい走ってしまい躓いた…何も無いところで転んだ…。

うわー…、一年前の入学式以来の恥ずかしさだ…誰か見てたらもうヤダ…あれだ…穴があつたら掘りたい？じゃなくて入りたいだ。

すると、見ていたのか誰かがあたしに手を差し伸べてくれた。これは…さっき話してた時の状況と同じ…。

「あっありがとう」

あたしは恥ずかしさのあまり顔を俯かせていた。しかし顔を少し上げてみると…秋がしかめっ面をしながらあたしを見ていた。

「危なっかしいな…大丈夫か？」

「うん…大丈夫。あの…秋って一年くらい前の始業式で誰か転んだ人に絆創膏あげたりしなかった？」

もちろんこれは自分の事だけれど「一年くらい前の始業式であたしが転んだ時、絆創膏くれなかった？」なんて…いくらなんでも聞きづらい…。

もし間違いだつたらかなり恥ずかしい事になってしまう。しかしどうやら間違いだつたようだ。秋は少し考える素振りを見せてから左右に首を振った。

「悪いけど誰にもあげた記憶はないな…と言うか夏騎に眼鏡を取られて散々だつたんだ」

「え…？」

それってどういう事？そう聞きたかったけれどあまりの驚きに言葉が出なかった。夏騎が眼鏡を…って事は助けてくれたのは夏騎だったの？ってなんであたしはこんな時だけ頭の回転が速いんだ…。

でも、もしそうならあたしの好きな人は秋じゃなくて…夏騎だ…。あたしがずっと好きだと思っていた秋は…なんだか少し助けてくれた彼と違う気がした。

あたしは…あの苦笑しながらも手を差し伸べてくれた優しい彼が好きだったんだ…夏騎をずっと好きだったのに…あたしは勘違いをして好意を秋じゃなくて間違えて夏騎に向けてしまっていたんだ。

秋は好き…でもきつと…それは恋の好きじゃなくて友達の好き…。あたしは恋をろくにした事がない…だから好きがわからなかった…でも…でもね？

秋が他の女子と話をしても別に大丈夫なのに…夏騎が他の女子と話してるのを見ると胸の辺りがモヤモヤして…なんだか嫌な感じがした。

あれが嫉妬？なのかな…。こんな形で自分の好きな人が分かっってしまうなんて…誰も…あたしも考えてもみなかった。

「どっした？急に俯いて…」

「おい…お前…春香に何した」

秋の真後ろで冬音がかなり低い声で秋を睨み殺気を放ちながら言った。そんな冬音にあたしは慌てて否定する。

「違うの！秋は関係なくて…」

「春香は優しいからね…だからそんな風に…。それよりお前」

「だからそのお前っての止めるよ」

「じゃあ何か？もやし眼鏡って言えばいいのか！」

「ついに合体させたか…もういいよ…なんとも言えよ…」

それを聞いて冬音が勝ち誇ったような笑みを浮かべる。ああ…ついに秋が諦めてしまった…。でも喧嘩が終わったので良しとしよう…。冬音の乱入により、とりあえずはこの件…保留にして置こうかな？

続く*

第十九話 迷探偵？冬音 冬音 side

つい…最近の事だ。春香の夏騎君に対する態度がどことなく変わった。いつもは秋、秋言っているのに最近は夏騎、夏騎だ。

話題でも夏騎君がよく出るようになった。そして秋にも向けた事がない視線を春香は夏騎君に向けていた。もしかして私の料理を誤って食べてしまったのかと思っただけ私には料理をしていなかった。

ここまで来て…春香の気持ち分からないほど私は鈍感ではない。春香に何かがあって秋から夏騎君を好きになったとしかいいようがない。

でもその何かがいマイチよく分からなかった。分からないまま今に至る。そして私は秋にムカツクし今も対抗心むき出しだけど…春香の変化について分かる事があるならば、嫌いな奴でも意見を聞いてみせるさ！

「それで心当たりは？」

「全く無いな」

何故か秋は断言する。もうちょっと考えろよ！春香の変化の原因知りたくないのか？まあ、知りたいから私の話題につきあってくれる訳だけど…。

「季野君、使えない…ハッキリ言って使えない…」

「なんでわざわざ二回言った」

「全く…こうなったらアレしかないよ」

「アレ？って何の事だ」

私の発言に首を傾げる秋。それはこれからの行動ですぐに分かる事なので、私はついて来るようにだけ言った。

「おい…これはストーカーじゃないのか？」

「変な言い方しないでよ、これは尾行と言つのです」

物陰に隠れながら私達は春香をスト…オホンツ…尾行しているのです。こうするのが人に聞いたり考えたりするより簡単だと思つたらね。

そんな訳でずっと春香を観察しているのですが…一時も夏騎君から目を離さないので…勿論、授業中は見られないけど…。

春香…秋に対してだつてこんなに熱狂的にならなかつたのに…。どうして？

どうして？春香…。

椅子に崩れるように座り込み、疲れたように秋は溜息を吐いた。さすがに一日丸ごと尾行していたので私も疲れていた。

元々体力は無い方だし…でも私の方が体力があつたらしい。私は立っているが秋は座ってる…フッフ…これは私の勝ちだな。

「特に原因の手がかりは無かつたな」

「おやおや？季野君も一応気にしてたんだ？」

「体力で…勝つたからって…威張るなよ…」

まだ言葉を、息を切らしながら話しているんだし…これは完全の私の勝ちだと確証して内心、秋に対して腰に手を当て仁王立ちをしていた。

「でも手がかりが無かつたのは事実だよ。ただ春香が夏騎君を見てるだけ…」

「…ん？そういえば昨日、春香が変な事を聞いてきたな。ほら、自動販売機の所で…」

「それは三日前の事だし覚えてるけど…変な事？」

三日前、私の紅茶などの飲み物を買いに春香が自動販売機へと向かっていた。そしてあまりにも遅いので私が様子を見に行くところ、春香が泣きそうな顔で俯いていた。秋のせいかと思つたけど確か冤罪だったんだっけ？

「ああ、一年くらい前の始業式で誰か転んだ人に絆創膏あげたりしなかつたか…そう春香が聞いてきたんだ」

「始業式…転んだ人…絆創膏？それ…たぶん春香自身の事だ」

「どういう事だ？」

興味津々でこの話に食いついてくる秋を見て私は、ああ…こいつも春香が好きなのかと…なんとなく思いながら秋に春香から聞いた始業式での事を話した。

「そうだったのか…実はその日、俺の眼鏡を夏騎に取られたんだ…だから夏騎と俺を間違えたのかもな？顔同じだし」

「でも…でもそれじゃあ、春香がその事を知っただけで季野君から夏騎君に乗り換えた尻軽女になっちゃうじゃない…」

「一応今の状況を否定したいみたいだけど頗る（すこぶ）口が悪いな…」

「そんな事、今どうでもいいでしょ？」

はい…今自分の事、棚に上げました。だって口が悪いのはしょうがないじゃないか！口が滑ってペラペラと喋ってしまい何組ものカッブルを破局に追いやってしまった私はもう手のつけようが自分でもないのです。

「それよりずっと気になってたんだが…どうして夏騎は夏騎君で俺は季野君なんだ？」

「えー？だって季野君が二人じゃ紛らわしいでしょ？」

「なら別に両方共名前呼びでいいだろ？いくら俺が嫌いでも」

「うーん…季野君が嫌いと言うより…名前が嫌いの方が正しいな」

私は“しゅう”と言う名前が嫌いだ…大嫌いだ。でも理由は今度話そうと思う…なんて言っただって今は春香の変化の方が正直気になる！

「季野君から夏騎君にこんな早く心変わりするなんて…あまりにも早過ぎる…もしかして前から気があったとか？」

「ない事もないな」

なんでこの人、冷静なんだろう…春香が好きなんじゃないの？いや、とりあえず春香本人にも話を聞いてみた方が早いんじゃない…。

そんな事を考えていると誰かが後ろから私の肩を叩いた。本井さんが冠凧さんだと思い、振り返ってみると…。

「二人が喧嘩もせずに一緒にいるなんて珍しいね？」

「はっ…春香!？」

「なんでそんなに驚いてるの？」

首を傾げながら春香はそう言った。どうやら近くに夏騎君がいないようなので動揺しながらも私は春香に直球で聞いてみる事にした。

「春香って…もしかして夏騎君の事好き？季野君じゃなくて…」

「季野く…ああ、秋の事？好きだったんだけど…改めて考えてみたらあたしが好きなのは夏騎だったみたい」

「そ…そう？」

あまりにもアツサリと春香が言うので私は安心していいんだか心配した方がいいんだかで困ってしまった。

「だからあたし、これから夏騎君が振り向いてくれるように頑張るの」

「そんな事し…ううん、私も応援するよ。頑張って」

「ありがとう」

春香は満面の笑みでお礼を言うと、図書室の方へと歩いて行った。

今…私、そんな事しなくても夏騎君はとっくに振り向いてるよって、言いそうだった。

それはこれから春香が気づいていく事で夏騎君が築いていくものだから…私が言っている事じゃない。ただ、それでも春香の気持ち嘘であったならと…

私は心のどこかで期待していたのかもしれない…。

続く*

第二十話 自分の為と人の為 冬音 side

春香の気持ちを確認したところで、私は夏騎君に相談されてしまった。あまりの急展開に私はついて行けず…。

「それで何故、俺の所に来る？」

「春香は無理だし本井さんだと言い方キツイし冠凧さんは夏騎君の事、好きっばいし…消去法でいくと季野君が残ったのです」

「なんだか余り者のような気分だな…」

溜息を吐きつつも、季野君は私の話をちゃんと聞いてくれそうだった。そういうところは優しいと思うので私も警戒心を一時的に解いて話す事にした。

「それで相談された内容が…最近春香が可愛くなった気がするんだけど好きな人でも出来たのかな？…って事で…」

「それに対して松永は？」

「可愛くなったって…可愛いのは元からでしょうが？好きな人はあんただよ！ってブチ切れた」

「後者は心の中で、だろ？」

「うん、さすがにそこまで私は無神経じゃない」

勿論、好きな人が夏騎君である事は言っていないけれど好きな人がい

ると言う事だけは言った。もし、いないって言って春香本人がいるって言ったら私が嘘つきになってしまふ…。

「それで俺にどうしろと？相談された件はそっちでなんとか出来たんじゃないか？」

「そ…それなんだけど…実はまだ続きがあつて…」

私が“春香には好きな人がいるよ”と言ったら、“やっぱり秋が好きなのか…”と変な誤解を生み出してしまい、私は誤解を解く事が出来ずに今に至るわけだ。

「別に季野君だから誤解したままでいいかと思つてたら誤解が思いのほか解けなくて…」

「一体、人の事をなんだと…でもそれじゃあ困るのは俺だけじゃなくて春香も困る事にならないか？」

「そう思つて誤解を解こうとしたんだよ。でも全然話を聞かずに自分の世界に入つちやつて…」

もうお手上げ状態でした。そして夏騎君は私にお礼だけ言って相談を中断して教室へと戻つて行つてしまつたのです。

「全く…誤解は解いてくれるんだろ？」

「……………うん」

「なんだよ、その怪しい間は…」

「いや…出て行った夏騎君を追いかけてもう一度話を聞こうとしたら“秋ならしょうがないか…”なんて言い出すからつい“季野君がなんだ、それは抜きにして自分の気持ちを伝えなさい”って言うちやって…」

そう言ってしまったと気づいた時にはもう遅かった。嬉しそうに笑いながら礼を言って夏騎君は駆け出して行ってしまっていた。

だからと言ってすぐに春香に告白するとは思えなかったので、こうして相談する暇があると言う事だ。しかし、絶対告白しないとは言い切れない。

「なんとか今の時期の告白は阻止しないと…季野君、春香が好きなんでしょ？なんとかしてよ」

「この時期に何かあったか？と言うか…俺は別に…春香が好きな訳じゃ…」

「語尾の方、声が小さくなってるよ…。それは良いとして、小テストがあるからただでさえ勉強に対しての集中力がないのに…」

「このまま行けば確実に赤点ではあるよな」

テストの為に何かしなければ…。その時、ふと季野君が持っている物に目が行った。

「何それ？クッキー？」

「ああ、さっき冠風さんに貰ったんだ」

「……食べる勇氣ある？一応……色々と研究してる問題部にいるし」
顔を背けてクッキーを無言で私の方へと押し付ける。なるほど、やっぱり食べる勇氣ないのか。

「それなら私が頂きます」

クッキーの袋に手を入れて、一枚取り出し口に運ぶ。別に食べれなくもない。

「……平気だけど？季野君も食べてみれば？」

「分かった」

恐る恐る、クッキーに手を伸ばして食べる。そして二個、三個と食べていく。

「ほら、大丈夫でしょ？それじゃ、夏騎君の様子でも見てくるかな」

「誤解を解きに行くのか？」

「別にどうしても解かなきゃいけないわけじゃないけど……これは自分のためだから」

「え……」

呆然と私を見る季野君を置いて、私は夏騎君の元へと向かった。教室を出て廊下を歩いていると夏騎君の姿が見えた。

「あっ松永さん」

「夏騎君、実は誤解を解こうと思って！」

「え？」

夏騎君は目を見開き、驚いた表情をする。私は息を吸ってから頑張っ
つて笑顔を作った。

「春香が好きなのは秋じゃないよ、と言うか春香に好きな人なんて
いないよ？でも…今は小テストがあるから止めた方がいい」

前者は春香の為、後者は自分の為の嘘。これくらいの嘘は許してく
れるよね…春香？

夏騎君はそうだったんだと嬉しそうに呟きながら、私に礼を言っ
て教室へと戻って行った。

「冬音？」

夏騎君が行った方と逆の方向から春香が私の名前を呼んでかけてく
る。

「春香、どうしたの？私に用？」

「うっん、冬音がいたから声掛けただけ」

そう言いながら笑って私に抱きついて来る。私は…別に春香が幸せ
になれるなら自分の幸せは後回しでもいいと思った。

「授業始まるんじゃないの？」

「あっそうだった！それじゃあ冬音も急がないと！」

「それもそうか」

顔を見合わせて笑いながら、私は春香と一緒に教室へと小走りに向かった。

続く*

第二十一話 ハムスター脱走

昼休み 一組教室

「ちょっと！なんか私の肩に乗ってない？乗ってるわよね！？」

桜パニック。肩に乗っているのはハムスターらしい。さっき何処からきたのかハムスターがやって来て近くにいた桜の肩へと上った。

そんな訳でその様子を見ていた冬音・あたし・冠凧さんしかハムスターだと分からない。桜は正体が分からずパニックになっていると言う事です。

冬音は面白がって教えないし、冠凧さんはハムスターが苦手らしい。そしてあたしはと言えば、冠凧さんと同じ理由で無理。

「冬音、取ってあげなよ？」

「えー？面白いのに…」

「正体が分かっているなら早く取りなさいよ！怖くて仕方ないわ」

「はいはい…」

冬音は渋々と言った様子でハムスターを取る。冬音が取ったハムスターを見た桜はすぐに笑顔になった。ハムスターが好きみたい…たぶん見るの限定で。

「それにしても…どこから来たんだろうね？」

「冠風さん、何か知ってるんじゃないの？」

桜が此処こゝぞとばかりに冠風さんに詰め寄る。詰め寄られた冠風さんはあたし達に目で助けを求めているけど…ちよつと迫力が凄くて助けられない。

冬音はそんな二人を楽しそうに眺めている。ダメだ…冬音に頼ろうとしたあたしがいけなかった。冠風さんも諦めたのか話を始めた。

「実は…一時的にハムスターを私達、サイエンス部が預かる事になりました。ペットを学校に連れて来るのは特例なので、とりあえず世話だけしてたんですけど…」

「可愛くて触りたくなつたから出したら脱走した…ってところか…」

冠風さんが続きを言う前に冬音がその続きを言った。そう言えば、さつき放送があつた。

《サイエンス部で預かっていたハムスターが脱走しました。皆さん、足元にご注意下さい》

確かそんな内容だつた気がする…でもしょうがないよね？可愛いから触りたくなるのは分かるよ！とっても分かる。

「部室で騒いでいたので何事かと思つていたら…ハムスターが脱走したとかで…私も探していたのですが、とりあえず見つかつてよかつたです」

「…そ…うだよね？とりあえず見つかったんだから」

目を泳がせてあからさまに逸らしながら冬音は顔を引きつらせていた。そんな挙動不審な冬音に、あたし達の視線は集まる。

「どうしたのかなー？冬音ちゃん？」

姉さんあねがニッコリ笑顔で冬音に問い質す。姉さんと言うのは、あたし達の中で一番迫力のある桜の事で…正に蛇に睨まれた蛙。ごめん冬音…あたし彼女に勝てる気がしない。

「そっそれがですね…何と言うつか…」

「ハツキリ……ね？」

「ハムスター逃がしました」

ああ…冬音がもう諦めたような顔をしている！それよりハムスターを逃がしたって事は？冠凧さんが不安そうな表情を浮かべる。

「もしかして…また一から探さないといけないんですか？」

「本井さんに寄って来たんだから、ハムスターの近くに本井さんを近づければまた寄ってくるかも…」

「冬音ちゃん？それを実行したら一週間お菓子禁止だから」

「全力で探させていただきます」

今日の冬音は完全に桜に負けてるな…。冬音にとってお菓子が一

週間も食べれないのは、あたしが一週間勉強をずっとするくらい辛い事なんだよね…さすが姉さん、容赦なし。

「秋と夏騎君にも手伝ってもらおう？私達四人でもいいと思うけど人が多いに越した事はないでしょ」

「そうだね、じゃあ夏騎達にも手伝ってもらおうか」

「そうですね」

あたしと冠凧さんが同意する中で冬音だけが難しい顔をしている。あたしは冠凧さんと顔を見合わせてから冬音に聞いてみた。

「どうしたの？難しい顔して」

「いや…思ったんだけど、三人共触れないんじゃないかな？季野君達は大丈夫だと思うけど…」

「が…頑張ってみるよ…」

あたしはそう言いながら内心、絶対に無理だと思った。だってハムスターって観賞する生き物だと思ってたんだもん、それなのに犬や猫みたいに触れるなんて！

「じゃあそれぞれ何組かで分かれて探した方がいいかもしれないわね。触れる秋達と冬音ちゃんの誰か一人ずつと私達の誰か一人ずつで組みましよう。これだと三組作れるわ」

「でも、どうやって分けるの？あたしは夏騎がいいんだけど…」

「あの…私も夏騎君がいいです」

いつもは控えめな冠凧さんがそう言った。前に冬音から冠凧さんが好意を寄せているのは夏騎だって聞いた事があったので驚いたりはしなかったけど…動揺は、していた。

「私、季野君と一緒にじゃなくていいんだ！私がハムスター触れて良かったー！」

あたしの隣で冬音ガッツポーズ。そんなに秋と一緒にが嫌なのですか…そんな事言ったら泣いちゃうよ？秋が…。

「私は秋と組む事にするわ。冠凧さんは冬音ちゃんと組みなさい。春香は言わずもがな夏騎君と組む事になるわ」

「それじゃあ、あたしが頼んでくるね」

早速一組を出て夏騎達のいる三組へと向かった。確か、今日は教室で食べるって行ってただけ…あつ、いた。あたしは夏騎達の所へと歩き、ハムスターについての事を話した。

「俺達が同意する前に勝手に決められてるんだな…」

「しょうがないよ、一大事なんだから」

呆れる秋とは裏腹に夏騎は協力的だった。もちろん秋も呆れているだけで協力はしてくれそう。そんな訳で夏騎達と共に一組へと戻った。

「それで、俺は誰となんだ？」

「口で説明するのは面倒だからメモに書いてみたわ」

そう言つて秋にメモを見せる。そっちの方が面倒だったんじゃないかと思つたけれど、今日の桜は冬音が敬語になる程の迫力なので黙つている事にした。

メモ

1 秋・私

2 夏騎君・春香

3 冬音ちゃん・冠風さん

そのメモを読んだ秋は夏騎に渡し、二人共読み終わったメモは桜の元へと回つた。そしてそのメモはゴミ箱へ。

それぞれの組み合わせであたし達は教室を出て、ハムスターを探し始めるのだった。

続く

第二十二話 ハムスター確保

夏騎と組む事になったあたしは早速、各教室とその近くを探す事にした。探しているのは小さくてしかも動くから…見つけるのは難しそうだ…。何より一番心配なのは冬音と組んだ冠凧さん。

もし食堂近くを探してたら冬音が食堂でご飯食べ始めちゃうよ…でも冠凧さんも“私もお腹空きました”って言って一緒に食べちゃうかも…。そう思って食堂を少し覗いてみると今まさにその状態。

溜息を吐いてから残して来てしまった夏騎の元へと戻る事にした。やっぱりあたし達の中で一番頼りになるのは秋と姉さ…じゃなくて桜だなー二人共しつかりしてるし。

そんな事を考えながら教室までの階段を上がって行くと上に居たはずの夏騎が走って階段を駆け下りてきた。あたしは事情を聞く為に慌てて夏騎を呼び止める。

「一体どうしたの？」

「見つけた」

それだけ言っただけで夏騎はまた階段を下りて行った。見つけたのはもしかしたらハムスターかも知れない…そう思ってあたしも夏騎に続いて階段を駆け下りた。

「桜side」

秋と組む事になった私は、春香達が各教室を探してくれているので

教室以外の職員室などの場所を探す事にした。小さいからよく探さないといけないんだけど…大丈夫かしら？特に冠風さんと冬音ちゃん…の二人…。

春香と夏騎君はとりあえず大丈夫だとは思っけど…両方の組み合わせ共に心配だわ。そんな心配をしている間にも秋は部屋を一つ一つ念入りに調べていた。やっぱり頼りになるのは秋が私ぐらいね。

そつと溜息を吐いたその時、

「一体どうしたの？」

「見つけた」

かなり焦っていたからだろうか？声が少し大きかった、それと私達が階段付近にいたのもあって春香と夏騎君の会話が聞こえて来た。会話の内容からして、ハムスターが見つかったのかもしれない。秋もそう思ったらしく、私達は顔を見合わせてから声のした方へと駆けて行った。

「紅葉side」

冬音さんと組む事になった私は食堂付近を捜していた。けれど冬音さんが“お腹が空いた”と言って食堂へと入って行ってしまった。仕方が無く私も冬音さんに続いて食堂へと入って行く。

いつもこんな感じなのかな？自由と言うか…よく食べると言うか…。食堂で注文した物が来るとすぐに食べ始めて、しかもその食べっぷりに唾然としてしまった。

「冠風さんは実のところどうなの？」

「え…？」

突然話しかけられて一瞬言葉に詰まったけれど、気がつき夏騎君の事だと悟った。私の答えを待っているのか食事をせずに頬杖をついて私を見ている。

「好き…ですけど恋愛感情と言うより尊敬の方が近いと思います。時々、部室にいるのを見かけたりしたのですが、何かを作っていたようなんです…夏騎君が去った後に完成品を見て…すごいと関心したんです…」

「へえ…」

その事を知らなかったのか興味深そうな眼差しで私を見つめる。そしてニッコリ笑うと食事を再開した。どうして急に聞き出したのかと首を捻っていると、冬音さんがふと顔を上げた。

「親友の恋敵かもしれない相手の事を聞くのが私のポリシーだから」

「えっ！」

もしかして冬音さんは世に言うあれですか？エスパーって言う…。戸惑いながら冬音さんを見ていると冬音さんが面白そうに笑う。

「冠風さんも春香と同じで顔に出やすいから…見てて面白い」

それだけ言うと冬音さんはデザートを買いに購買へと向かって行った。私の顔ってそんなに分かりやすい？手鏡を白衣のポケットから

取り出して、私は徐ろに顔を見つめるのだった。

「春香side」

不意に後ろを振り返ると、さっきの会話で聞きつけてきたのか秋と桜があたし達の後ろからついて来た。冬音達は食堂にいたから、さすがにそこまでは声が届くはずないよね？

そう思い、私は桜に冬音達を呼んで来ると告げてから食堂へと向かった。そこでは冠凧さんが自分の顔を手鏡で見ながら溜息を吐いていた。

「どうしたの？」

「私、顔に出やすいみたいなんです…思ってる事が…だからさっきも冬音さんに言い当てられてしまって…」

「それ、あたしも冬音に言われたよ」

冠凧さんに同じ雰囲気を感じながら、あたしはこんな事を話しに来た訳ではない事を思い出した。そして周囲を見渡す。

「冬音は？」

「デザート買いに行くとかで…」

「自由！こんな時でも自由！って突っ込んでる場合じゃない！ハムスターが見つかったらしくて、冬音がいなくていいからとりあえず冠凧さんだけでも来て？」

「あっはい！」

白衣に手鏡をしまい、慌てた様子であたしの後ろについて来る。桜達の元へと戻ると息を切らせながら座り込んでいた。

「どうしたの？ハムスターは？」

「見失っちゃったのよ…全く…夏騎君は…先頭なんだからしつかり…しなさいよ…」

「いめん…」

どれだけ走ったらこんなにも息を切らせるのだろうか？あつでも腰を低くして走ってたから、その分疲れが増すのかも！今日のあたし、冴えてる！おっと本題が…。

「でもどうする？また探すの？」

あたしの一言で全員の顔から血の気が引いたのはまず間違いないでしょう。そんな最悪の展開を想像していると誰かに後ろから肩を叩かれた。

「誰…って冬音！？もー！こんな時になんでデザートなんか…
ってあれ？」

「デザート買ってたら見つけた」

そう言って冬音は手に乗せているハムスターをあたし達に見せた。まさかの自由人がハムスターを見つけちゃったよ…。

「今度は逃がさないでね？私、踏んじゃうから…」

「あと一歩遅かったら……って奴？」

「まさにそんな感じ」

購買で買ったらしいチョコパンを頬張りながら冬音が何度も頷く。そんな事があって、ハムスターを無事ケージに戻して一件落着いた。

その後、飼い主が引き取っていった。たぶん飼い主の方には、あたし達の事は話してないんだろうな……と言つか話せないよね……。

授業がとつくに終わっている放課後の教室で少しだけでも触っておけばと後悔しながら、あたしは鞆を手に取り教室を出たのです。

続く*

*

第二十三話 鬼ごっこ？

いつもと変わらない昼休みだった。突然、校内放送が流れた。あたし達だけではなく全生徒が静まり返ってる中でスピーカーからの声だけが響いていた。

声は冠風さんのモノだったので、またサイエンス部が何かやらかしたのかと思っただけれど、どうやら違うようだった。

《毎回、問題ばかり起こしているので、謝罪も兼ねてこれからゲームをしたいと思います。ルールは簡単。鬼ごっこことほぼ同じです。赤いＴシャツを着た私達、サイエンス部から逃げ切れれば勝ちです。勿論、賞品もあります。どう言う物かは終了まで公開いたしません。参加する方はサイエンス部までお越しください。締め切りは昼休みが終わるまで。開始は放課後からです》

そう言っただけで校内放送が終わった。賞品が気になるのか生徒達が次々とサイエンス部へ向かっている。あたしは一緒に昼食を食べていた桜と冬音に聞いてみる事にした。

「二人は行かないの？」

「行くけど、もう少し人が減ってから行くわ。人が多い中で押し合いながら行くなんてごめんだもの」

「右に同じ」

桜達と同じ考えの人もいるのか、六・七人まだ教室に残っていた。食事を再開しようと思っっていると秋と夏騎が教室に入るところだっ

た。

途中で何かあったのか秋が女子生徒を引き？がそうと悪戦苦闘している。しかしそれを夏騎は面白そうに見ているのであたしは黙っている事にした。だって夏騎がつまらなくなっっちゃうかもしれないから！

「離しなさいよ！！私の彼氏なんだから」

桜が凄い気迫で言うと女子生徒は一瞬たじろいで教室を出て行った。あたし達の視線は桜へと向けられる。

「ああでも言わないと離れなさそうだったじゃない。他にもっと簡単な離し方があるなら是非やってみなさいよ」

「虫を頭に乗せる…とか？」

「冬音ちゃん？それじゃ逆に離れないじゃない。ほら、他にないでしょ？」

そう言われてしまうと本当にないので、あたし達はその話題を止めて食事を始めた。それから人が少なくなってきたところで部室へと向かった。

どうやら夏騎と秋も参加するらしい。夏騎だけじゃなくて秋も参加するとは…意外だった。あたしはチラチラと秋の方を振り向く。傍から見れば拳動不審な人である。

「チラチラと…俺の顔に何か付いてるのか？」

「べ…別にー？」

「先生！春香が挙動不審なので何か隠し事があるんだと思いまーす！」

冬音が拳手をしながら高々にそう言った。それを聞いた たぶん冬音が言った先生（？）の 桜が腕を組んで頷いた。それにしても、桜は姉さんとも先生とも呼ばれてしまっているのか…そして本人が気にしないで逆にノッてしまう！

どうしよう…この中でまともな人間があたしと秋だけになってしまふ…。桜は…突っ込みを放棄してるもん…突っ込んでよって言ったら怒られそうだから言えないし。そんな事に悩みながらあたしは溜息を吐く。

「ふーむ…それじゃあ何で挙動不審なのか白状してもらおうじゃない？」

「参加！秋が参加するのは意外だと思ってるんですよ！隊長」

只今の呼び方 ・姉さん・先生・隊長。たぶんこのままノリで呼び方が増えるでしょう…苗字や名前以外の呼び方が出たら、それは桜だと思っつていいと思います…ってあたしは誰に言っつてるんだ。一人ポケツッコミ程、虚しい物はないよ？

「ところで…何で冬音はあたしの心が読めるの！？」

「……………フツ」

「鼻で笑った！この人、あたしの事を鼻で笑いやがったよ！」

鼻で笑われるくらいなら、いつものように顔に出てるよと言われた方が何倍も、何百倍もマシだ！チクショーなんか悔しい！

「まあまあ、落ち着いて…」

「夏騎は落ち着き過ぎなんだよ！冬音も桜に対しての呼び方統一してよ！分かりにくいわ！一々説明するのも面倒だわ！こんなコントみたいな事しないで早く行くよ？…分かったら返事は！！」

「…はい…」

ツッコミギレたところで、あたし達は冠風さんの所へと向かった。部室の出入り口付近で汗を流して座っている冠風さんの姿が見えた。

「大丈夫？冠風さんも疲れてるんだね。あたしもだよ…別の理由で」

「あつ春香さん…それに他の皆さんも…。スミマセン、ちょっと疲れちゃって…」

「気にしなくていいのよ、それよりまだ参加しても大丈夫かしら？定員とかあるの？」

桜さんが疲れ切っている冠風さんに聞いている！質問攻めをしている！冠風さんはまだ頭が回らないのか当惑した表情をしている。

「まだ大丈夫みたいだよ！ここに参加者の名簿があった」

「ちょっと冬音さん！？いいの？勝手に見たりして」

「……ダメだね」

ダメだと分かっているのにこの人は……。でもツツコミ疲れたので冠風さんの隣で休もう。あたしはそう思い、冠風さんの隣に座る。

「名簿に記入していただくだけでいいので、参加する人は書いてください」

「じゃあ、私と春香と夏騎君と秋と冬音ちゃんでもいいのかしら？」

「いいんじゃない？どうでも……」

「冬音ちゃん、もしかして貴方飽きた？」

「うん」

冬音は突然飽きたようでその辺をウロチョロしていた。しかし、何を思ったのか立ち止まり、夏騎の手をジッと見つめている。

「双子って…全て同じなのかな？手の大きさとか、スリーサイズとか」

「スリーサイズ！？暇過ぎてついに双子に目を付けたわね」

暫くペンで書く音だけが響き、あたし達の中で誰一人として喋る人がいなかった。冬音は今もターゲットロックオンしてるよ、手をすごい見てるよ。

「双子って言うてもさすがにサイズまでは同じではないと思いますよっ」

おおっ！冠風さんがフォローしてくれた。天使に見えるよ。冬音は一瞬悲しそうな顔をした後、夏騎にベツタリくっついていた。

あたしとしては嫉妬する時なんだろうけど…今日の冬音はいつにもまして自由。何かあったのかと心配になったりするのです。

「冬音どうしたの？何かあった？」

「敢えて言おう、暇であると。そして放課後までこんな暇が続くのかと考えると…ゾツとする」

「暇なんだね…後、授業あるよ！？忘れてない？」

もしかして授業も暇とか言っつんじゃないだろうね？これだから出来る人は…。ここで嫉妬です。冬音は首を横に振った。そして一言。

「眠い…」

食後だもんね。食後は一番眠いよね。そして冬音は去って行った。たぶん教室だろうな…。

まだ続き

ます！

第二十四話 鬼ごっこ？

放課後、ついに放課後になりました。あたし達は屋上前の階段の所で集まっていた。ちなみに冬音は“眠い…”と言っているだけあって授業中に何度も寝ては起こされ注意されを繰り返す…授業中は安眠出来ないよ。

そして放課後になったところであたし達は集まり、ゲームが開始されるまで待機している今正にこの状態へと戻ります。

「いつ始まるのかしら？」

「そろそろだと思っけど…」

あたしがそう言った、その時にタイミングよく校内放送が流れた。辺りがシン…と静まり返る。やっぱり賞品の効果か？

《皆さん。たくさんさんの参加ありがとうございます。それでは今からゲームを開始したいと思います…が、ここで特別ルールです。サイエンス部の部員から逃げ切れれば勝ちですが、反対にタッチされず部員を捕まえる事が出来れば賞品が一つづつ増えます。やり過ぎないように気絶させる程度でお願いします。それではゲームスタート》

校内放送が終わった。たぶん今の声は部の部長？まず言いたい…なんて白状な部長なんだ！だって部員気絶OKって…なんでわざわざ特別ルール作ったんだらう普通でいいじゃん！このゲームで一番損してるのは部員だと思っ。

そしてどうやら部員の意見を聞かずに部長の独断で決めたらしい。なんで分かるのかって？だってここまでブーイングが聞こえてくるから…。

「大丈夫なのかしら？」

「桜の心配も分かるよ…あたしも物凄く心配だもん」

やがてブーイングが無くなり、多数の足音が聞こえて来た。やっと鬼が出てきたらしい。キヤーキヤー、ワーワーと叫び声が飛び交っている。

運良く、まだここには来ていないけれど、来るのも時間の問題だ。

それに第一、こんなに大勢で固まっていて捕まらない訳が無い。頭の回転が速い桜と冬音と秋の三人はとっくに思いついていたらしい。

「大勢で固まるのは良くないわ。複数に分かれましょう。まず夏騎君と秋。そして私と春香。冬音ちゃんも余り」

「酷い！せめて余り物には福があるよって慰めて！」

「余り物は…所詮余り物よ」

「キツイ！結局これだ！」

なんだか…桜が冬音を単独にしたのが分かった気がした。今日の冬音は面倒くさい…そしてツッコミ疲れる。あたしは心の中で桜にグツジョブと親指を立てたのだった。

さて、桜と逃げる事になったあたしは廊下を堂々と歩いていた。こ

これは桜の提案。逆に堂々としていれば捕まらないと言う自信からのこの行動。

「ねえ…前から来るけど？」

「当たり前じゃない。透明人間じゃないんだから見つかるでしょ？」

「捕まらないとか言っただけじゃなかった？」

「私、過去は振り返らない主義なの」

こんな事があつていいのですか！？相手はどんどんあたし達に迫ってくる。運が良い事に後ろからは来なかったの…後ろに猛ダッシュ！

不意に振り返ると桜もなんとか付いて来ていた。更に後ろには鬼が付いてきていた。しかしサイエンス部は体力がある人が少ないようなので、すぐに諦めていた。

立ち止まって桜を待つ。なかなか来ないので戻ってみる。何かあった！！何故か桜が捕まっていたのです。捕まえられた人には緑のカードが渡されている。

ちなみにそのカードをとんでもなく記憶力の良い人が渡すので、捨てたりしても逆に失格になってしまうのです。そんな人をさっきあたしは見た。

すると、あたしに気づいた桜が恨めしそうにこちらを見上げていた。体力が無いわけじゃないけれど…短距離が苦手らしい。

「春香が早過ぎるからいけないのよ。もう一人が潜んでたみたいで最初の鬼が体力切れだと安心した間に捕まったわ」

「ええっ！あたしの所為なの？」

「道連れにしないでくださいだと思いなさい」

「は…はい、ありがとうございます」

今、あたしはどうしてお礼を言いながらこの人に頭を下げているのだろうか…。しかしそう反論する前に鬼が来てしまったので逃げる事にした。

なんとか鬼を振り切ったところで、冬音がすごい速さであたしの前を通り過ぎていった。体力のない冬音がすごいスピードを出していたので一瞬呆然とした。ハッと気がついた時には冬音の姿はどこにもなかった。

首を傾げながら仕方が無く、周りに注意を払いながらも思考をめぐらせる。そう言えば…このゲームっていつ終わるんだろう？

「あと30分位ですかね？」

「そっかー…ってえっ!？」

声のする後ろへと振り返ると、制服姿のままの冠風さんが立っていた。一応、冠風さんも部員だったはず…。

「私は放送係だったので鬼にはならないんです」

「そうだったんだ…それにしても冠風さんまでエスパー化？」

「全部声に出してましたよ？」

苦笑いで冠風さんがそう言った。そうか…あたしは声に出してただ…気をつけないと独り言を言っている人に見えちゃうな…。

「今のところ捕まったのは、本井さん・夏騎君の二人です」

「桜は知ってるけど夏騎まで捕まったの？」

「はい…ちょっと冬音さんが…」

一体冬音が何をしたんだろう……すごい知りたいけど聞くのが怖い…。やっぱり聞く事にした。

「聞きますか？実は…転んだので助けようとして…」

「夏騎が冬音を助けようとしたの？」

「あっいえ…転んだのは夏騎君で冬音さんが助けようとしたんですけど…冬音さんの“苦手な人”が近くにいたようで逃げてしまったらしいんです」

ああ…もしかして、さっき冬音が全速力で走っていたのはそう言う訳だったんだ。聞いたところで、鬼が来ない今の内に休憩する事にした。

残り時間30分

続く

第二十五話 鬼ごっこ？

【秋side】

俺は夏騎と逃げる事になった。とにかくこんな時でも夏騎は楽観的で鬼に追いかけてられて捕まりそうになっても“まだ捕まっていから大丈夫”と笑って言っている。確かにその通りだけれど、もっと気をつけろと怒鳴りたい…居場所がバレるから怒鳴れないが…。

今はとりあえず三組の教室に逃げ込んでいた。それにしても心配だ…春香や本井も心配だが松永が一番心配だ。第一に体力がないし、今日は何故かすごく眠そうだった。

「そんなに心配なんだ？」

夏騎が覗き込むように顔色を窺いながらニコニコと聞いてきた。俺は顔を背けて目だけ夏騎の方に向ける。

「心配に決まってるだろ。本井も春香も」

「秋は松永さんを一番心配してると思ったんだけど…」

なんでこんな時だけ鋭いんだ！心の中で夏騎を睨みながら、上辺では冷静を装う。心配していると素直に言ってもいいけれど、本人にだけは知られたくない。弱みを握られた感じがして嫌だ。

「お前の考えすぎだ。俺は松永が嫌いなんだ」

「そうなんだ？」

納得したのかしてないのか分からないけれど、周りを確かめ始めたのでこの話題はもう終わりなんだろう。

「秋って松永さん、好きだよー」

……どうやら終わってなかったらしい。そして何故か俺が言った事と矛盾している事を言ってきた。夏騎は周りを確かめるのを止めてこちらを見ている。

「なんでそうなるんだ？嫌いって言っただろ」

「嫌よ嫌よも好きのうち……」

「嫌いなものは嫌いなんだ」

「そんな嫌い嫌い言ったら可哀想だよ」

一体こいつはどっちの味方なんだろうか……もういつそ夏騎を鬼にしてしまえ。でもそうしたら俺が最初に捕まるな、今一緒にいるし。

「噂をすればなんとやら……松永さんが切羽詰ったような顔でこっちに来るよ」

「切羽詰った顔？」

廊下を見てみると本当に切羽詰った顔で息を切らせながら……もう歩いてるに近い速度でこちらへと向かっていた。もうこれ、普通に歩いた方が早いんじゃないかと言う速度だ。

そして俺達の存在に気づくと夏騎を見てホッと、俺を見て明らさ

まに嫌そうな顔をした。何なんだ、この違いは。

不満なので睨んでやると睨み返してきた。一応、無視はしないようだ。だからって睨み返されてイラツとしなかった訳じゃない。

「夏騎君、まだ捕まってなかったんだ？良かったね」

「うん、良かった」

二人が笑い合って話してるのを見てみると、不意に松永がこつちを見たので慌てて目を逸らす。…なんで目を逸らしてるんだ？別に逸らさなくても良かったはず…。

首を傾げていると冠凧がやってきた。俺達三人は警戒したけれど本人が言うには放送係なので鬼ではないらしい。

「そんな訳で私は残り時間を知らせに来たのです」

「そういえば残り時間知らなかった…あと何分くらい？」

腕を組み、首を傾げて松永は冠凧に聞いた。時計を確認して手に持っている紙を見ながら残り時間を確認している。

「35分くらいですね」

「まだそんなに時間あるんだ…私、生き残る自信がない」

「松永さん、体力ないんだっけ」

苦笑いをしながら夏騎が松永を慰めている。また不意に松永がこち

らを見て、俺は目を逸らした。何でなのか首を傾げる。

自分だけではとても答えが出そうに無かった。それに鬼が来てしまったらしい。ジリジリと鬼が近づいて来るのでこちらも後ずさりを見ながら、逃げるタイミングを見計らう。

そして俺達三人は教室の出入口へと走った。途中で夏騎が机に足を引っかけバランスを崩す。捕まりそうになる夏騎を助けようと松永が戻ろうとするが、顔色を変えてどこかへと歩いた方が早いようなスピードで走るあの松永からは、とても想像出来ない速さで走って行った。

一瞬呆然としていたけれど、鬼がまだいる事を思い出して走り出した。夏騎は……どうせもう助からないな。

鬼をなんとか撒いたところで一息つく。松永も同じ方向に逃げてきたと思っただけれど、どうやら俺の近くにはいないらしい。それか俺が嫌いで隠れてるかな。

俺も嫌いだし、それで良いんだが今日の俺はおかしい。目が合うと逸らす…自分で考えてみても答えがサッパリ思いつかない。

今度、春香か本井辺りに聞いてみるか…ともかく今は少し休みたい。な。床に肩膝だけ付き腰を下ろす。完全に座ってしまうといざと言う時、逃げ切れないからな。

それにしても…春香と本井は大丈夫だろうか。体力に自信があっても、しかも早い春香は大丈夫だと思うが本井は…昔付き合ってた頃に競争をしたけれど確か…短距離が苦手な最初だけ全然遅いんだよな。少し経った後で早くなってくる。

夏騎はダメだな…もう捕まった。松永は…無理だな。逃げ切ったとしてどこかで倒れてるに違いない。そう思い、視線を左に移してみると…倒れていた。

俺は溜息を吐きながらも、松永を自分の場所まで運ぶのだった。

続く

第二十六話 鬼ごっこ？

【冬音side】

なんで私だけ一人…。まだ不満だけど一人の方がどちらかと言うと行動しやすい。そう考えると一人の方がいいのか…。じゃあ別に不満に思わなくて良かったんだ…。一気に不満解決。

鬼も来ないので暇を潰していると、鬼が来た。見つけたらすぐに逃げないと私、足遅いからな…。ん？こつちへ向かって来る鬼の顔になんだか見覚えがあった。

遠いのでよく分からないけど、見覚えがあるような…。気になったらどうしても知りたくなるので捕まる覚悟で待ってみる。

そしてある程度、顔の判断がつく所まで鬼がやって来た。見つからないように、そっと顔を見してみる。……私の“苦手な人”だった。

そういえば、“苦手な人”もサイエンス部だっけ…。って見つかった。まじまじと見てたら見つかった。私…この人だけは…苦手なんだ……！

いつもの私では考えられない程の速さで走る。もう…この人だけは苦手！…なんとか撒いたところで冠風さんに会った。

「どうしたんですか？息を切らせて…」

「冠風さん！？見逃して！」

反射的に頭を下げて冠風さんに頼み込む。しかし冠風さんの反応は

苦笑いだった。そして慌てて弁解する。

「私、鬼じゃないです」

「えっ… そうなんだ？ 良かった… さっき鬼に追いかけられたばかりで」

「そうなんですか？ 鬼に追いかけられたにしては顔が青いですけど…」

そう言っただけで心配そうに私の顔を覗き込む。青い顔をしてるのか分からないけど、冠凧さんの心配具合からして相当青い顔をしてるらしい。

「苦手な人に会って… 頑張っただけで逃げた。サイエンス部だったの忘れてて」

「冬音さんに苦手な人がいたなんて…」

「いるよ！ 私だって無敵な訳じゃない… それにしても、冬音さんって呼んでくれるんだ！ 嬉しい」

「えっ！？ いや… これはですね！ もっと仲良くなりたいなーと思っただけ…」

おお… 冠凧さんが可愛い！ やっぱり可愛い女の子って言うのは恥じらいが必要なのかな…。 だったら春香も本井さんも… 可愛い女の子の部類に入るんだろうな… 私は可愛くない…。

まだ一人で名前の呼び方についての事を話している冠凧さんの頭を

そつと撫でてみる…。

「…冠凧さん、髪サラサラでちょっとムカツク」

「ええっ！突然頭を撫でておきながら、それですか!？」

「ごめんごめん、本当にイラツとし……」

「?どうしたんですか?いきなり黙って」

さっきの鬼がまた追いかけてきた…と言うかもうこつちへ走っている。なんで分かったんだろう…隠れてなかったからか…。

考えてる場合ではないので冠凧さんの腕を掴み、走る。苦手なものから逃げる時はこんなに足が速くなるなら…体育の授業で追いかけてもら…いや、止めて置こう…怖いから。

途中で冠凧さんは別に逃げなくてもいい事に気づいたので腕を離す。鬼はもういなかった。たぶん撒いたんだと思う。

それに気づくと同時に疲れが襲ってきた。息を切らして近くにあった三組の教室へと向かう。後ろからは冠凧さんがゆっくりと歩きながら付いてきていた。

いいな…別に鬼から逃げなくていい人は…。三組の入り口から中を見ていると夏騎君がいた。ホツと息をつく。しかしもう一人、秋もいたので嫌そうな顔をしてやった。

そしたら睨んできたので睨み返す。視線を夏騎君へと戻して傍まで近づく。冠凧さんはまだ休憩してるのか、教室には入ってきていな

かった。

「夏騎君、まだ捕まっつてなかったんだ？良かったね」

「うん、良かった」

私達が笑い合つて話をしていると、ふと視線を感じてその方向へと目を向ける。秋が見ていた…が目を逸らされた。私は首を傾げる。

すると誰かが教室へと入つて来た。思わず警戒したけれど冠風さんだったのでホツとした。冠風さんは夏騎君達に私に話したような事を教えていた。二人もホツとする。

「そんな訳で私は残り時間を知らせに来たのです」

「そつといえば残り時間知らなかった…あと何分くらい？」

私は腕を組んで首を傾げながら聞いた。苦手な人のシヨックで聞くの忘れてたよ。時計を確認して手に持っている紙を見ながら残り時間を確認している。たぶん、あの紙にゲームの時間が書いてあるんだろうな！。

「35分くらいですね」

「まだそんなに時間あるんだ…私、生き残る自信がない」

「松永さん、体力ないんだっけ」

苦笑いをしながら夏騎君は私を慰めてくれている。ああ…優しい！また視線を感じてその方を見ると、また秋だった。そして目を逸ら

される。なんだろう…イラッとした。

足音がして出入口の方へ視線を移すと鬼が来ていた。タイミングを見計らって出入口へと走る。しかし途中で夏騎君が机に足を引っ掛けバランスを崩して、捕まりそうになっていた。

助ける為に戻ろうとしたけれど、そこで苦手な人がいる事に気づいて冷や汗をかく。そして助けるのを止めて走る。ごめん、夏騎君。でも私はあの人だけはダメ！

走り疲れたところで近くの見つかりにくそうな所で休む事にした。なんとかそこまで歩いていき座る…倒れると言う方があってるかもしれない。

少し経った時に足音がした。でも起き上がる気力がない。もうどうぞ、捕まえるなら捕まえてください。完全に諦めモード。

しかし、どうやら鬼じゃなかったらしい。足音の本人は近くに腰を下ろして休憩しているようだった。残念ながら^{まいた}瞼を開けるのも面倒で誰かは確かめられなかった。

そして足音さんは私にやっと気づいたようで溜息を吐きながらも運んでくれるようだった。しかし、運んでもらって何だけど、せめて負んぶくらいにして欲しかった。

腕引つ張って、引き摺ってるよ！？腕痛いし、摩擦で背中熱っ！お願いだからせめて負んぶで！痛さと熱さに頑張って耐えていると、やっと着いたらしい。

たぶんそんなに距離なかったんだろうけど痛かったから！熱かった

から！かなり長い事のように感じた。そして、なんだろう？これは肩か？たぶん肩に頭を乗せてもらってる。

でもこの体制はあまり寝るのには向かないな……寝ちゃダメだよな……。とにかくこの足音さんには後でお礼と怒りをぶつけてやるぞ。痛熱かつたんだから。

そんな事を考えながら私はいつの間にか寝てしまっていた。寝ちゃダメなんだけど。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6343x/>

無限問題

2011年12月18日05時50分発行